

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム 8

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 —改革への処方箋—



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
第8回シンポジウム
「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究
—改革への処方箋—」

2007年6月30日(土) 14:30～16:50
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペースにて

Program

14:30	座長挨拶	司会	木俣 章 (法学部専任講師)
14:40	発 表		伊藤行雄 (経済学部教授)
			村山光義 (体育研究所准教授)
			坂本 光 (文学部准教授)
			萩原真一 (理工学部教授)
			佐藤 望 (商学部教授)
15:50	ディスカッション		伊藤行雄 (経済学部教授)
			西村太良 (担当常任理事)
			朝吹亮二 (日吉主任代表)
16:10	自由討論		
16:45	所長挨拶		横山千晶

パネリスト発表要旨

(当日の配付資料より抜粋)

I 本研究の目的と提言の意図

伊藤 行雄（経済学部教授）

本研究では、2003～2004年度基盤研究「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点―将来への提言を含めて―」の問題提起を受けて、セメスター制度の検討、総合教育科目や語学の評価問題、目的別、習熟別のクラス編成、講義要綱の分析（学事センターの協力を得て）など、2年間にわたって研究会、シンポジウムなどを通して議論を重ねてきた。特に今回は、学生サイドからみた諸問題を視野に入れてカリキュラム、授業内容、副専攻制、セメスター制などについての問題点を検討するという試みが行われている。このアンケートの分析結果は、本研究にとって重要な資料のひとつとなっている。1991年の大学設置基準の大綱化以来、各学部は各分野で改革の努力を重ねてきたことは事実である。しかし、こうした取り組みは、各学部間のみならず、学部内においても正確に把握されているとは言い難い現状にある。前回の研究に続いて、現在更に学部の壁を越えて情報を交換することの重要性が益々高くなる時期、資料やアンケート調査や資料分析を通して、本研究ではより実現可能な提言を提示するよう努めた点を強調しておきたい。

II 成績評価方法に関する実態調査報告―成績評価の厳格化にむけて―

村山 光義（体育研究所准教授）

【目的】大学教育の質的保証として、厳格な成績評価を実施・公開・説明する責任が求められている。そこで、成績評価方法の実態調査を試み、問題点の把握と今後の取り組みについて具体的な提言をすることを目指した。

【方法】日吉で開講されている授業全体について、成績評価方法の概要を知るため以下の調査を行った。

1. 履修案内・講義要綱の公開情報の読み取り
2. 外国語科目に関するアンケート・聞き取り調査
3. 学生へのアンケート調査

【主な結果】評価方法の内容は、授業形態・分野別に多彩であり、多くの科目で複合的に用いられていた。しかし、その比率・重み付けなどは必ずしも明確ではない。また、評価基準・内容、記載方法等の統一性は低く、全体に各教員任せの部分が多い。科目・部門・学部等での組織的取り組みが行われているケースもあるが、不十分である。さらに、学生は成績評価に関する不明確・不統一性に少なからず問題意識を持っており、また、自己の評価に充分納得しているわけではない。以上をふまえ、7つの具体的提言を示すこととする。

III 習熟度別クラス編成の整備

坂本 光（文学部准教授）

【目的】外国語を典型とする一部科目では、学生個々の習熟度・学習目的に対応する為、多様なクラスによる複雑なカリキュラム構成を採用している。特にクラス形態の細分化が著しい英語科目を中心に、学部間に共通してみられる問題点を見出し、その解決方法を提案することを目的とした。

【方法】2006年度に慶應英文学会が行った全学部・一貫教育校英語カリキュラム調査（共催：外国語教育研究センター）を踏まえ、各学部に於ける英語教育を中心に、習熟度別クラス編成の現状を検討した。

【問題点と提言】学生の習熟度・学習目的に応じた科目構成を実現し、同時に現実的な履修機会を提供する事は極めて困難である。現状を改善し、教室など日吉キャンパスの各種リソースを有効利用する為にも、設

置科目のクラスター化などが望まれる。また成績評価の公正さと客観性を維持し、学生の学習意欲に結びつける為にも、外部指標の導入、ポートフォリオ形式による成績評価法の採用、履修要件・修了要件の明示が検討されるべきである。

Ⅳ 学部カリキュラムの比較分析

萩原 眞一（理工学部教授）

この調査の目的は、日吉設置学部共通総合教育科目、必修英語科目および必修諸外国語科目を対象として、6学部がそれらをどのように維持・管理・運営しているのかを、多角的に比較分析することによって、カリキュラムの現状を把握し、課題を提起することにある。目的を達成するために、2006年度の学則や履修案内に加え、カリキュラムに関わる情報が掲載された資料等をできる限り収集し、それらに準拠しながら、3つのカテゴリー毎に、縦軸に学部名、横軸に比較項目を並べた図表を作成した。また、履修者全体に関わる項目および必修外国語科目全体に関わる事項を比較する図表も別途作成した。次に、これら4つの図表を分析し、その結果浮き彫りになったいくつかの課題に対し適宜コメントを加えた。こうした調査および分析の作業は、提言8、14、18、19、27等をまとめる上で、土台作りの役割を果たしたといえる。

Ⅴ 学生アンケート調査結果

佐藤 望（商学部教授）

【目的】2005～2006年度の基盤研究では、カリキュラムに関して学生がどのような意見をもっているか、ということについて広範に調査した。大学のカリキュラムは、教員の思いや考えのみが強く反映しがちであるが、これについて学生がどのように考えているか、その実態を知る必要があると思われるからである。

【方法】慶應義塾大学全学部の学生5000人を無作為抽出し、約28%の学生から回答を得た。質問内容は、1) シラバスと履修登録制度について、2) 各科目の満足度、レベル別クラス編成の是非、専門科目と一般科目の関係・副専攻制度等について、3) 成績評価・楽勝科目について、4) 学生による授業評価などであった。

【主な結果】全般的に、慶應義塾大学の大学や授業に対する評価は非常に高いことが明らかになった。慶應義塾大学の学生は、一般教養的知識と専門知識のバランスを取る学習が最も重要であると考える傾向がある。また、多くの学生が副専攻制に興味を示していることもわかった。また、学生による授業評価は必要と大多数の学生が考えているという結果も見られた。学生が、カリキュラムのあり方の問題を非常に真剣に考えているということも浮き彫りになっており、それらは自由記述の回答から見て取れる。本基盤研究の提言の多くは、この調査結果を反映している。

Ⅵ 日吉共通科目のカリキュラムを運営・検討する組織の設立について

伊藤 行雄（経済学部教授）

慶應義塾大学では大綱化のあと、「大学教育問題検討委員会」が設置され、各学部は競って総合教育科目、語学などの改革に急いだ。特に「一般教育問題検討委員会」が発展的に解消したあとに設立した「大学教育委員会」ではこうした学部間の情報の交換を行った。特に同委員会の諮問委員会「日吉カリキュラム等調整部会」では「日吉カリキュラム検討委員会」の設置を結論として上申しながらも、現在に至ってもこの提案が実施されていない。日吉キャンパスの最大の問題点は共通科目として設置されている科目群をいまだに学部決定待ちに依存するところが多い。

【問題点】

- 1) 「基盤研究」としては、日吉主任会議からも発案されている「日吉共通科目カリキュラム検討委員会」を早急に設置すべきと考えている。
- 2) こうした「検討委員会」が設置されれば、セメスターの問題も含めて、科目のレベル分けが可能になってくるものと考えている
- 3) レベル分けを可能にすることによって、秋学期の登録、教養科目を主体とした副専攻制の検討も可能になってくる。
- 4) 繰り返しになるが、日吉主任会議からも提案されている「日吉共通科目カリキュラム」の設置が急務と思われる。

はじめに

大学教養研究センター所長 横山千晶

私が教養研究センターの所長となったとき、正直のところ、私はまだこの「教養」というものの意味がよく分かっておりませんでした。しかし、教育というものは大変「熱い」テーマであるということだけは理解していました。時代が教育のあり方、そして教養の伝達のあり方を模索しているのです。教育の内容はもちろんですが、教員の評価——最近何度も話題に出ておりますFDや授業評価の問題などです。さらに社会貢献、地域連携なども教育の場で考えなければいけないということも最近問題になっています。

各大学では、これらの時代の声に応えようとさまざまな委員会が立ち上がり、さまざまな新しい機構が開設されているということも、もう皆さんご存知の通りでしょう。それに併せて、慶應義塾大学ではFDはどうなっているのか、また社会貢献、地域連携への取り組みはどうなっているのかという数多くの問い合わせが教養研究センターに寄せられてきています。

ただ私から言わせていただければ、慶應では数々の試みを十分にやってきている。確かに新しいネーミングもなければ、新しい機構もないかもしれないが、慶應では個々人の先生方が十分に教育内容の見直しと改善に日々努力しているのです。ただそのことは外に伝わっていません。大学がまず行うべきことはすでにどのような試みが為されているのかをまず掘り起こし、それらをつなぎ合わせ、サポートすることでしょう。

慶應義塾を支えているのは各先生方の意識と努力、そして学ぶことに対する学生の意欲です。ひとりひとりの先生方は自分がどのような立場でこの義塾に身を置いているのかを強く意識しています。学生にしてもしかりです。ただし個人の努力には限界があります。大学という巨大なシステムの中で統合しサポートしていかないと、これらの努力は報われないことも明らかです。

私たちが今回「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」2005～2006年度の研究成果として提案する「改革への処方箋」も教職員と学生ひとりひとりの意識を

まず浮上させよう、そしてそれをつなげて、より高いレベルに昇華させようというひとつの努力のあらわれです。つまり、すでにある声をより広く、学生にも、そして慶應内外にも伝えていくことにより問題意識を共有し、新たな認識につなげていくひとつのステップです。

前回の基盤研究のカリキュラム研究を踏まえたシンポジウムで、私は次のような挨拶をしました。

「大学で教えるという立場を教養研究センターに入ってもう1回考え直してみると、3つの要素がある。まず研究すること。そして教えること。これはもちろん研究したことを伝授することも含みます。そして、どのようにしてよりよく教えられるかというシステムを考えること。これらの3点はこの慶應義塾に入った者の義務でしょう」。

そして、慶應義塾では、学部ごとにこの3点への取り組みを考えていますし、学部内でカリキュラム改革も進んでいます。しかしさらに重要なことは、私たちひとりひとりが慶應義塾の人間としてこの3点を考えていくということです。

たとえば、私は大学の法学部に属し、同時に教養研究センターに属しています。しかし私は学部でもこのセンターのためだけでなく、義塾のために働いていると強く思っていますし、そうありたいのです。この想いは、基盤研究「教育カリキュラム研究」に携わってくださっている方たち皆さんが共有しているものです。その想いをひとりでもより多くの教職員と分かち合っていくことこそが、最も大切だと思っています。その気持ちが義塾、そして学部をも変えていくことになっているでしょう。

そのためにも大切なことは、教育を受ける側、つまり学生の意見に耳を傾けるということです。評価すべきなのは授業ではありません。授業は「学び」のごく一部にしかすぎません。慶應義塾という機構の中で学生がいったいどのようにして生きているのか、そして教員とどのように関わっているのか、学生の生

の声を聞いてみますと、実は授業内容だけでなく、シラバス、教室、あるいはカリキュラムの体系そのものに彼らがどんなに強い改革の意識と希望を持っているかということがはっきりと分かってきます。授業評価とは学生から教員に向かって一方的に行われるものではありません。これらの学生の声にどのように対応するのか。そして学生と共によりよい学びの場をつくろうとする教職員の希望にどう応えていくのか。大学の姿勢そのものが最終的に問われるのです。

今回のカリキュラム研究は上で述べた教員と学生のふたつの意識を改めて確認しました。次はここで培われた意識や学生の声を義塾の改革そのものにどのようにつな

げていくかという作業になりますが、それはやはりより高次のレベルで取り組む問題となるでしょう。

もちろん、私たちとしては他大学の動きにも目を配らなければなりません。慶應義塾は義塾として独自の改革を進めるべきでしょう。そのための一歩として、この処方箋を今回出させていただきました。今回のシンポジウムはその骨子を対面でお伝えする場です。自らとまわりのあり方をしっかりと見つめ、何を行っており、何が足りないのか。何がうまくいっており、何がうまくいっていないのか。処方箋が提案するさまざまな治療法がよりすこやかな慶應義塾を生み出すことを願ってやみません。

「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究

—改革への処方箋—」

司会 木俣 章
パネリスト 伊藤行雄
村山光義
坂本 光
萩原真一
佐藤 望
ディスカッサント 西村太良
朝吹亮二

法学部専任講師
経済学部教授
体育研究所准教授
文学部准教授
理工学部教授
商学部教授
常任理事
日吉主任代表、法学部教授

木俣章（司会） 本日はお忙しいところ、ご参加どうもありがとうございます。教養研究センターシンポジウム「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究—改革への処方箋—」を開催いたします。本日は、同タイトルの基盤研究報告書が出たことを受けての報告会であり、常任理事の西村太良先生、および日吉主任代表の朝吹亮二先生にもおいでいただきました。限られた時間でございますので、なるべく効率的に進めたいと思います。ご協力のほどよろしくお願いします。

全体の進め方ですが、まず基盤研究会の座長および幹事の皆さんから今回の報告書の骨子を報告していただきます。おそらくおひとり10～15分かかりますので、計70～80分お時間を拝借したいと思います。その後でディスカッサントとしてご参加の常任理事と日吉主任からお話を伺い、その後、皆さん方のご意見、ご質問を承って闊達な議論を進めていきたいと思います。私は法学部の木俣と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それではさっそく、まず基盤研究の座長でおられる伊藤行雄さんから報告をお願いいたします。

本研究の目的と提言の意図

伊藤行雄 皆様、暑いところお越しいただきましてどうもありがとうございます。西村先生には一度、「大学教育委員会」で30分ぐらいお話しさせていただいたことがあります。今回の研究報告を日吉の先生方、また他

キャンパスの先生方にお聞きいただくのは初めての機会となります。最後までよろしくお願いいたします。

まず、プログラムに「目的と提言の意図」という大それたことが書いてありますが、基本的には2005年に「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点」という

The Liberal Arts
The Liberal Arts
The Liberal Arts

**慶應義塾大学の教育カリキュラム研究
—改革への処方箋—**

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム
平成19年6月30日 来往舎シンポジウムスペース
1

The Liberal Arts
The Liberal Arts
The Liberal Arts

「本研究の目的と提言の意図」

研究会座長・経済学部教授
伊藤 行雄
2



伊藤 行雄 氏

テーマで皆さんと議論をしたことがベースになっています。2003～2004年度の基盤研究会では、日吉キャンパスで展開されている授業について、講義要綱などいろいろな資料を使ってカリキュラムの諸問題をわかりやすく整理していただきました。私たち2005～2006年度基盤研究会の出発点は、その成果をさらにどう詰めていくかという点に絞られました。そして、前回の「基盤研究」の報告を基にして成績評価の問題、あるいは学部カリキュラム比較調査、学生から見たときの学事的な問題点を明らかにするとともに、一番大事なことは、長年言われている日吉設置学部共通の総合教育科目のカリキュラム検討委員会の設置を提言することだということになったわけです。これは朝吹先生が代表役をつとめられている日吉主任会議より出されている問題点でもあります。が、カリキュラム検討委員会の設置を提言することが私たちの最大の目標のひとつでした。

こうした「総合教育科目カリキュラム検討委員会」が存在しないとほかの議論がなかなか始まらない部分があります。私たちはそれに向けていろいろな提言をしていくということで、その中にここ数年来、各学部で少数セミナーなどを大きく展開して、いろいろな形態で先生とのコミュニケーションもできるようなコースもできてきました。法学部は先んじて副専攻を行っています。それから経済学部は研究プロジェクトおよびPCP (Professional Career Programme) などが展開され、研究プロジェクトでは3年生で5万字近い論文を執筆しながら就職活動を行っています。それから他学部でも、

PCP同様、キャリアコースが設けられています。

このような点を踏まえ、日吉のカリキュラム検討委員会が設立され、ある種の科目のレベル分けさえできれば、(いろいろな形態があると思いますが) いずれ副専攻制度ができるのではないかとことを考え、さまざまな検討を重ねてきました。今日これから日吉の諸問題をほかの先生方が示してくださいますが、我々が考えている以上に学生からのアンケートは切実な、しかし非常に明確な答えを出してくれていますので、このアンケートを参考にしてお聞きいただければと思っています。この2年間、回数的にはほぼ30回近い研究会および幹事会を実施してきましたが、その成果を発表したいと思います。

基盤研究はこれで終わるのではなく、今回の提言を現実化させる、実現化するために更にきめ細かい検討をこれから1年半かけて続けていく予定ですが、それはまた改めてご報告いたします。以上です。

司会 伊藤先生には後ほどまたもう一度ご登場いただきたいと思います。引き続きましてプログラムにごさいますように、「成績評価方法に関する実態調査報告」について村山さんの方からご報告ください。

成績評価方法に関する実態調査報告

村山光義 それでは、よろしくお願いします。私の報告の担当部分は「成績評価方法に関する検討」ということです。現在、大学改革の中で教育の質的保証が社会的に求められています。その大きなうたい文句として厳格な成績評価をし、それを社会的に説明できるよう、どんな活動をしているのかを明らかにしなさいという課題を突き付けられているわけです。しかし、我々は成績評価についてどんな認識を持っているか、よくよく考えてみると話し合ったことがないのではないかというのが研究の動機の出発点です。

慶應義塾大学のオリジナリティのある成績評価のポリシーがあるのか。ひょっとするとこれは教員の特権で、アンタッチャブルな部分で隠されてきたようなものなのではないか。この辺を明らかにしていくことで、まずは実際にどんな成績評価がなされているかということを調べなければいけないということです。それで最終的に提



村山 光義 氏

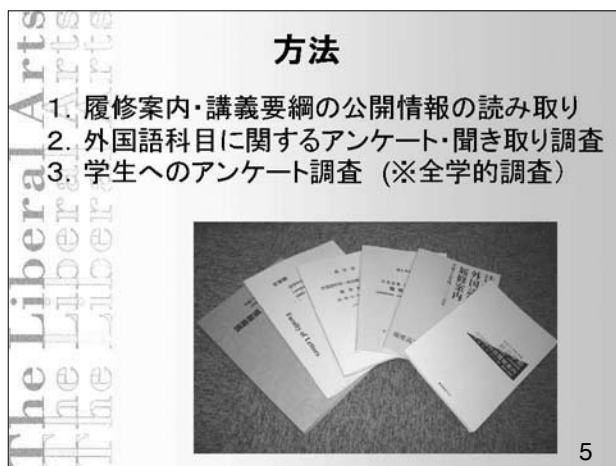
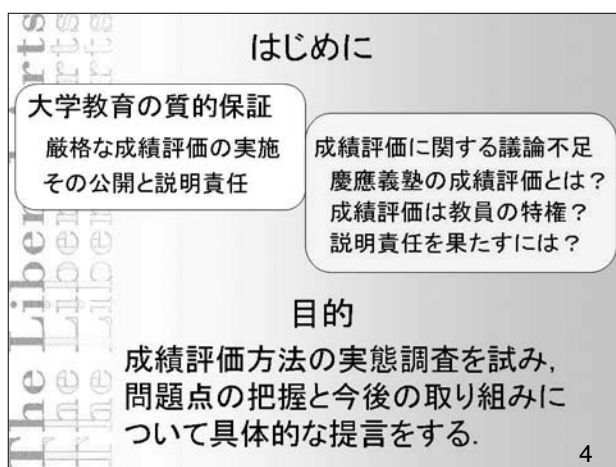
言として7つ挙げさせていただいたわけです。それに関する分析から考えたことを説明させていただきたいと思っています。

調査方法と提言のバックグラウンド

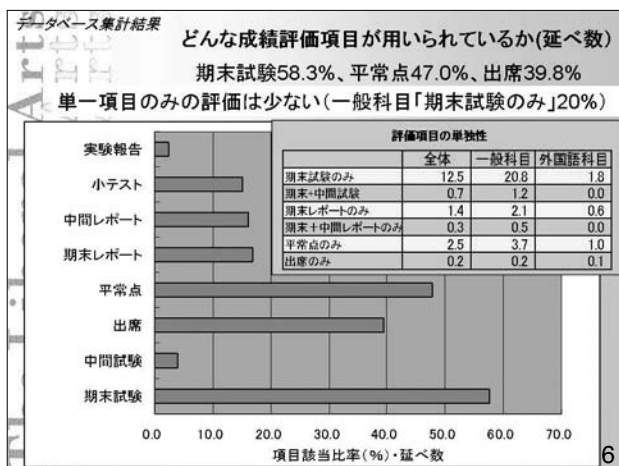
調査と申しておりますのは主にふたつです。まずは図5にありますような冊子体になっている講義要綱や履修案内の中で、「私の授業の成績評価はこうです」と記述のあるものをデータベースとして吸い上げ、分類・分析したもの。そしてもうひとつは、必修の外国語については十分に冊子体に情報を載せていないものも多かったものですから、さらに聞き取りアンケートで「実際の成績評価方法を教えてください」というようなことを聞きました。さらに、後半の方で佐藤先生がご報告されますけれども、学生へのアンケート調査の中に成績評価項目に関することを含んでいただいたので、それも併せてここで報告します。

まずどんな内容の成績評価項目があるかということですが、冊子体を繰り返しながら評価項目を調べていきました。期末試験や平常点・出席点というものが、これは延べ数ですけれども多く用いられています。ただし、期末試験のみしかやらないという科目は、図6の表中にありますように全体で12%程度しかありません。たとえば、外国語科目などではほとんど単独項目で評価をするということはあり得ないということで、いろいろな項目を混ぜて評価をしているということが分かってきたわけです。

そこで少し分野を勝手に分けさせていただいたのです



が、授業の形態ややり方は分野でどうも特徴があるということは分かってきました(図7)。たとえば、人文社会系などは期末試験の比重が非常に大きい。自然科学系などでは、それに加えて中間レポートというようなものがよく用いられている。少人数セミナーや演習、実験系のものでは複合的に平常点、出席点、期末レポートというものが特化してきます。芸術(身体知)系とまとめましたけれども、少し座学を離れるようなことが多いかと思われるものでも期末試験を用いていますが、平常点も



データベース集計結果

☆評価項目は多様で、授業形態(分野)ごとに特徴がある

人文社会系：出席・平常点の比率は低く、特に期末試験の比重が大きい。

自然科学系：期末試験の比重が多いが、中間レポートの採用が群間で最も多い(36.1%)。

演習・実験・少人数セミナー：平常点・出席点・期末レポート(56.6%, 41.8%, 41.8%)。これらを複合的に用いているケースが多い。

芸術(身体知)系：期末試験が88.4%、平常点も51.2%採用され、期末レポートも39.5%と多い。

外国語科目：期末試験が59.8%に加え、平常点・出席が平均より多い(67%, 55.1%)。

7

ある。外国語科目に限っては非常に多くのものがありますが、平常点、出席点というものが全体の中ではわりと重み大きい。

こういったことを見てくると、いくつか考察してみなければいけないことがあります。「平常点」とは何だろうかということです。実は私はこの調査をし始めて「平常点」という言葉を知りました。私は体育研究所の教員ですが、平常点という言葉を知りませんでした。図8は実際に平常点というものが何であるかということが明記されている割合です。案外明記されておらず、つまり平常点とそのまま書いてあるので、学生も平常点だと理解していると思いますけれども、いったい平常点とは何なのかということはよく話し合ってみた方がいいのではないかと。実際に書いてあるもので見ますと、授業への参加であったり態度であったり、宿題をするなどということですが、こういったものを実は教員ごとに勝手に決めているということが分かります。なぜかと申しますと、報告書の後半に「資料」としてまとめてありますが(88頁)、平常点に含まれない、吸い上げ切れない「その他」とい

データベース集計結果

「平常点」とは何か？

平常点の内容に関する明示割合(%)

一般科目	割合(%)
共通授業科目	5.8
少人数形式	50.0
文学部	42.9
経済学部	1.6
法学部	25.0
商学部	12.9
医学部	18.8
理工学部	17.5
諸研究所	7.7
外国語科目	
文学部	65.5
経済学部	37.9
法学部	36.9
商学部	73.9
理工学部	49.2

平常点とは何か？ 報告書：資料2表3

授業への参加度・授業への貢献度
出席状況および授業態度
宿題(への取り組み)、予習
発表、討論への参加、発言

☆教員ごとに定義された多様な内容を含み、その他の評価項目報告書：資料2表4とも重複する内容が多い

8

データベース集計結果

複数項目間の重みは？

複数項目間の評価比率に関する明示割合(%)

一般科目	割合(%)
共通授業科目	7.4
少人数形式	4.2
文学部	3.6
経済学部	1.6
法学部	2.6
商学部	5.7
医学部	25.0
理工学部	28.4
諸研究所	11.5
外国語科目	
文学部	40.2
経済学部	24.1
法学部	13.1
商学部	14.2
理工学部	18.0

☆複数の評価項目の重みづけを明らかにする例は少ない

“総合的に評価する”では曖昧である

実際の記載例
出席点30%、レポート・試験70%
出席率・小テスト40%、期末テスト60%
期末試験70%、平常点30%を基準として55点以上を合格とする
クイズ20%、ディスカッション・プレゼン40%、期末レポート30%、その他宿題10%

9

う項目(89頁)とほとんど同じようなものが重なっています。ですから、ある教員は平常点とは出席だと考えているし、ある教員は「出席は出席、平常点は平常点」と分けて考えている、平常点という言葉を使わずに態度という言葉を使っている、というようにばらばらであることがよく分かってまいりました。

そうなりますともうひとつ、いくつもの項目を使って評価をするのですから、その項目間の重み付けみたいなものが明らかにされているかということ、ほとんど明らかにされていません。図9にありますように、出席○%、レポート●%、試験△%ということをあらかじめ宣言してあるかどうかということでききますと、比較的外国語科目などは多いのですが、ほとんどされていないという状況です。ですから、「総合的に評価する」とは書いてあるのですが、いろいろなものを見てはいるけれども、いったい何が決め手なのかということは、授業の中では先生方が説明しているのでしょうかけれども、冊子体からは吸い上げることができないという状況です。

これと同じように、必修の外国語科目をアンケート調

必修外国語科目アンケート・聞き取り調査 報告書:資料2 表5-10
☆複数項目による評価において、各項目の比率は明らかか？
☆複数担当者間のテキスト統一、評価内容の統一はあるか？
☆語種・部門・学部などの組織的取り組みはあるか？
☆評価内容統一に関する議論、検討をする余地がある
10

査しました（図 10）。たとえば、英語なら同じ「英語 I」でいくつもクラスがあり、複数の先生方が担当しています。複数の先生方の中で評価の統一であったり、テキストの統一であったり、複数項目がちゃんと同じ比率になっているのかなどを確かめてみなければいけないのではないかということです。これも簡単に申し上げますと、複数項目で比率を明らかにしてはいません。なかなか十分には公開されていないということです。それからテキストが統一され、評価内容が統一されているかという、テキストの統一はなかなか難しいようで、統一されている学部・語種では評価も統一されているようですが、基本的には担当者任せという部分が依然残っています。

評価のために何か部門ごとに組織的に取り組みをしているかということについて見ますと、取り組みがないわけではないのですが、その取り組むレベルはそれぞればらばらであり、単に ABCD の比率を決めておこう、新任者に対してだけ大まかなマニュアルを出しておこうというような状況であるということが分かりました。このあたりを報告書の方では、90～101 頁に一覧表で各学部ごとにまとめさせていただきました。今後、評価内容を統一するというに向けて、議論や検討をすることが必要になります。

次に、学生アンケートについてです（図 11）。報告書後半の資料編に全体の集計が出ていますが、問 45～50 が成績評価に関するものです。「大学の授業の成績評価の基準は示されていますか」（問 45）に対して、学生全体の 64.0% は肯定的な意見を持っています。しかし逆に、半数近くが「示されていない」と否定的な意見を持っている学部もあり（法学部や医学部）、学部ごとに若干の差が示されました。それから「授業ごとに成績評価

学生アンケート結果 報告書:資料4 問45-50
「問45:成績評価基準は示されているか」
「問48:授業ごとに成績評価の方法にばらつきがあること」
「問50:これまでの成績評価に納得がいくか」
「問47:プロセス重視と結果重視のどちらがよいか」
「問49:相対評価と絶対評価のどちらがよいか」
☆成績評価方法に関して、明確性や統一性に疑問を感じている者が存在
教員と学生の間に認識の差がある
11

の方法にばらつきがあることについてどう思いますか」（問 48）に対して、「問題ない」と回答している学生は 22.2% です。「仕方がない」と回答した学生が 44.6%、「不公平、とても不公平」と回答した学生が 33.7% ということで、半数以上は問題がないわけではないと考えているわけです。そうして得られた成績評価について納得がいくのかどうか（問 50）という、半々という感じで納得いかない科目の存在も見取れました。また納得のいかない学生たちは「教員に質問する体制が整っていると思いますか」（問 50-1）に対して、86.0% が「整っていない」と回答しています。ですから、学生の一定の思い込みであり、いい成績評価基準ではないと思っている人も存在するようです。そして、プロセス重視か結果重視かという観点は、成績の付け方のポリシーとしていつも問題になりますけれども、学生は 6 割程度がプロセス重視にしてくれと言っているわけです。相対評価・絶対評価については、8 割近くが絶対的評価にしてくれということを考えています。我々はこういった声をある程度意識しているのかどうかということも問題であろうかと思っています。

ですから、学生が疑問を感じている比率の高いものについては、社会にということではなく、塾内の学生たちに対して明確なものを提示するということが説明責任の第一歩ではないかという気がするわけです。以上が 7 つの提言をするということのバックグラウンドになります。

調査結果から提言へ

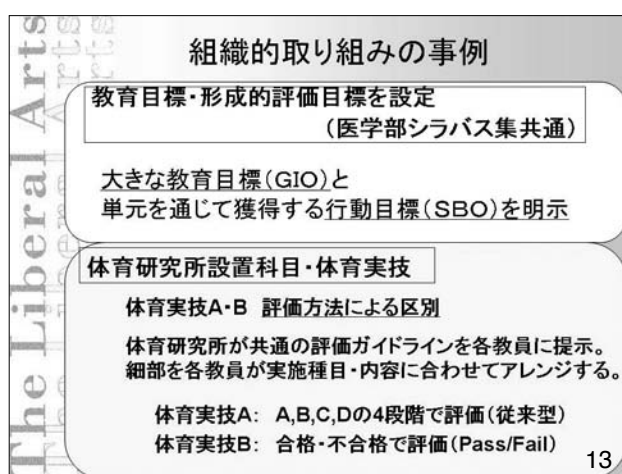
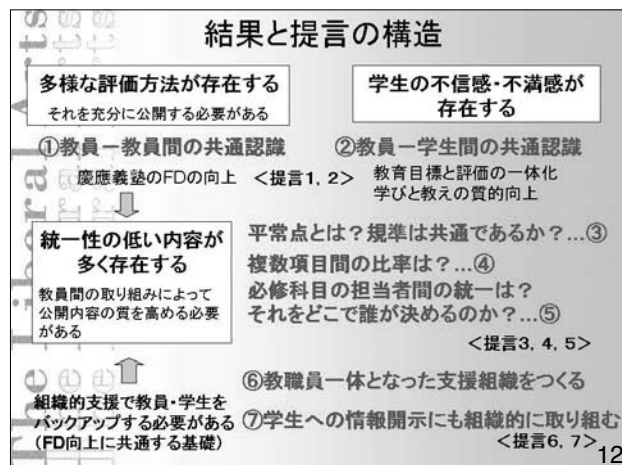
成績評価に関する調査を行って見たら、非常に多様な方法で評価がなされていることがわかりました。それをもっと公開する必要があります。それから学生には一定

の不満・不信がある。このあたりは我々がもっと話し合っ
て、教員相互にあなたの分野ではこんな評価方法が大事
です、私の体育では技術や態度を観察したり、具体的に
テストをしたり、技量が上がるのが大事な観点であつ
たりしますというようなことを、その分野はそうで、こ
ちらはこうであるということをお互いに教員間が共通認
識を持ち、でもこうした方がいいのではないかという議
論が必要になります。

同様に、こういう学び、教えの構造があるという授業
のこの目標を学生にも提示し、だからこうやって評価す
るんだということを納得させる必要があります。これが
提言1、2になります。教員も学生も、もっとお互いに
よく認識し合って、どんな評価が必要か、されている
のかということを真剣に考えることが第一歩だと思いま
す。

そして、多様な評価方法が用いられているということは
は分かりましたが、その統一性、内容にはいろいろなレ
ベルがあります。たとえば、平常点など何が基準である
か、ABCを付けるのであれば、どこかで点数化をしない
限りは、AとBの境はどこにあるのかという説明が
できないはず。こういったことも比率をちゃんと明
示し、担当者間でこころましようということをお互いに
なければ説明ができないのではないかということです。で
すから、まずはどんな評価が必要か、どんな種類のもの
があるかということを確認した上で、ではもっと細かい
ことを詰めてみんなで話し合おう、もっといろいろな部
門内で共通の認識を持ちましようという取り組みをしな
くはないと思います。

しかし、これだけ大きい組織で人数も教員も多い状況
では、一教員の私がこころましようと言ってもなかなか
うまくいくものではありません。ですから、組織的な支
援が必要となります。それも学生側に向けた取り組みが
必要だと考えています。たとえば、職員の方（学事セン
ターなど）にもご協力をいただき、講義要綱の冊子には
このくらいのことをこのように書きましようということ
を、どこか（だれか）が後押しをし、サジェスションを
して統一していくという動きがなければ、なかなか進ま
ないであろうということです。これが私の部分の7つの
提言の構造です（図12）。



成績評価に組織的に取り組んでいる事例

最後に、調査結果をふまえて批判ばかりをしても仕方がないので、成績評価に組織的に取り組んでいる事例もたくさんありますので、そういったものを簡単に紹介したいと思います。またアンケートに回答いただいた貴重な先生方のご意見も報告書の102～103頁に直接そのまま載せさせていただきました。

ひとつは医学部のシラバス集に共通で用いられている評価に関する目標設定です。教育目標、このことのために評価と目標をセットにしますということが形成的評価ですが、この中で大きな教育目標GIO(General Instructional Objectives)と単元を通じて獲得する行動目標SBO(Specific Behavioral Objectives)を明示するという取り組みがなされています。

それから、私の所属している体育研究所の事例です。体育研究所は2004年に評価方法によって体育実技というくくりの科目をふたつに分けました。ひとつは従来のABCDと評価をする科目(体育実技A)です。これについては、幸いに体育研究所というまとまりがあります

ので、研究所でガイドラインを決め、出席は60点、残りの40点を授業の目的に合わせて、技術、態度、理解というもので比率を変えて自由に設定してくださいということをお願いして、明確に点数化をしてABCを決めます。もうひとつは合格か不合格という評価をする科目です（体育実技B）。これは履修者に差がつかない、履修者をABCというふうに差をつけるような目的を持たない。たとえば、山岳という体験型の山に登るという授業があります。合宿で行います。この授業で同じように体験をすべて終えて1単位を取得する上で、君がAで、君がBで、君がCという差をつける目的は最初からなくて、すべて体験をしてもらうのだとすると、それがAとDという2段階になってはおかしいのではないかとということで、PassとFailで合格・不合格という形を取るのが本来の教育目的と評価のセットであろうということで、現在行っています。このような取り組みもありますので、いろいろなところにお互い情報を開示して、よりよい成績評価システムをつくっていくことが必要だろうと思います。以上です。

司会 ありがとうございます。ご質問があらうかと思いますがけれども、報告を一通り終えた後で一括してご質問をお受けしたいと思います。それでは引き続きまして、坂本さんから「習熟度別クラス編成の整備」についてご報告をお願いします。

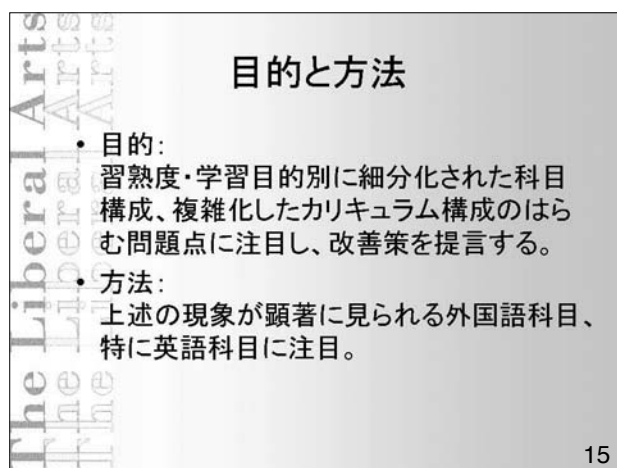
習熟度別クラス編成の整備

坂本光 文学部の坂本光でございます。よろしくお願いいたします。まずタイトルをご覧いただきたいと思います。「習熟度別クラス編成の整備」について、つまり現状が抱える問題点を取り上げ、その問題点に対する改善の提案をするというのが私の担当部分の目的です。

英語科目における習熟度別クラス編成の現状と運営上の課題

図15にございますように、習熟度別あるいは学習目的別に細分化された科目構成が昨今増えているわけですが、そうして複雑化したカリキュラム構成は、問題点を多々はらんでいます。ここではそれに注目し、いくつかの改善策を提言したいと思います。

習熟度別クラス、目的別クラスというのは、つまり用途に合わせて多くのクラスの種類を設定するということです。クラスが細分化されるわけですが、それに際しま





坂本 光 氏

しては各学部あるいは各科目担当部門が独自に創意工夫を凝らしていらっしゃいます。そのため年度単位で細かなカリキュラム修正が行われていますし、数年単位では大きな修正がためらうことなく、どんどん行われているのが実情です。しかしながら、そうした実情、実例を見ますと、クラスの多様性、あるいは細分化ゆえにカリキュラムの整備上、あるいはいったん整備したカリキュラムの運営上さまざまな困難が見受けられるように思います。そこで、そうしたカリキュラム整備上の問題点、および運営上の問題点、この2点について注目し考えてみたいと思います。具体的には「方法」のところに書きましたが、上述の現象が顕著に見られる外国語科目、特に英語科目に注目させていただきました。習熟度別クラス編成、あるいは目的別クラス編成というのは外国語科目、一般教育科目、あるいは専門科目、こういった科目でもそうしたカリキュラムをつくり得るわけですし、実際行われています。中でもすでに大規模に実施されているのが外国語科目です。そして特に英語科目に顕著でしょう。そこで、おそらく問題点も英語科目に顕著であろうと考えました。

これは皆さんもすでにご存じの理由によるものと思われます。つまり英語というのは、新入生の大部分がそれを既習言語として学習することになります。したがって、中級レベル以上で学習することが多いわけです。また、新入生にもさまざまな入学経路がございまして、その経路によって、あるいは選抜方法によって、すでに身に付けている英語力に、レベルの上でも、あるいは英語のど

こが得意で、どこが苦手かという点においてもバリエーションが見られます。加えて、大学の中での、また学部の中での英語学習の目的にも多くのバリエーションが考えられます。たとえば、学部での専門教育を十全に受けるために英語を勉強したい、大学院に進学するために必要である、あるいは就職時に必要となるなどです。そういったさまざまな目的、およびその組み合わせを学生それぞれが想定して英語を勉強することになるわけです。そこで、それに対応すべく、各学部はさまざまな科目編成上の工夫を凝らしているわけですが、これが結果として先ほど申し上げましたクラスの多様化・細分化に結び付いていくわけです。

では実際、各学部での英語教育はどのようになっているかということに関しまして、どのように調べたかということをご説明したいと思います。慶應英文学会では昨年度、外国語教育研究センターとの共催にて大会を開催させていただきました。その大会のポスターセッション企画といたしまして、各学部そして全一貫教育校に英語カリキュラムの内容について問い合わせ、および調査を行い、場合によっては聞き取りも行い、それらの特徴を一瞥できるようにまとめさせていただきました。その結果は「慶應義塾一貫教育諸学校・同大学における英語教育の紹介」というポスターセッションにまとめられ、その内容は冊子体といたしましては、外国語教育研究センターが発行した『シンポジウム報告書4』に収録されています (<http://www.flet.keio.ac.jp/~englit/KSES/agm02.html> 参照)。調査はどのように行ったかと申し上げますと、各学部につきましては、まず学生が知ることができる情報を土台としました。つまり履修案内、講義要綱、その他学生への配布物をすべて集め、そこからカリキュラムの全体像を一覧できるように整理させていただきました。その上で整理したものを各学部の担当部門に戻しまして、確認を受け、さらに必要に応じてカリキュラム構成の担当者などから聞き取りを行っております。一貫教育校につきましては今日のこの会ではお話しする機会がありませんが、同じようにまずは履修案内、講義要綱等を拝見させていただきました。しかし高校・中学・小学校におきましては、印刷物としてそういった資料が用意されていない例も多いので、その場合は聞き取り調査の比重を増やして、まとめさせていただきました。

調査

「慶應義塾一貫教育諸学校・同大学における英語教育の紹介」
(慶應英文学会第2回大会ポスター・セッション、
共催:外国語教育研究センター)

冊子:『慶應義塾大学外国語教育研究センターシン
ポジウム4「慶應英文学会第2回大会」』(外国語教
育研究センター、2006年)

WEB:
<http://www.flet.keio.ac.jp/~englit/KSES/agm02.html>

16

問題点

- 科目の細分化による、各種リソース不足(人員、時間数、教室数など)。
- 設置数の不足による、十分な履修機会確保の困難。
- 難易度、授業形態が異なる科目間で、成績評価に整合性を持たせることの困難。
- 履修要件、修了要件を客観化し、明示する事の困難。

17

そうした調査の結果、各学部の習熟度別あるいは目的別のクラス編成、特に英語科目におけるクラス編成には、共通して4つの問題点があるのではないかという結論に至りました(図17)。まず1点目ですが、科目の細分化による各種リソース不足。具体的には人員、つまり教員数、それから時間数、教室数です。時間数と教室数につきましては、キャンパス全体として時間割編成を行うためにおのずと外枠を決めなければなりません。もちろん科目の種類を用途別に細分化するということは、単純に考えますと科目数が増えるということになります。また、そういった発想で科目を細分化するということは、科目ごとの用途を明確に認識することにつながります。そうしますと、その科目の用途、目的に即して収容定員、履修者の上限を考えることになり、やはりおのずと少なめに設定されがちです。その結果、それが許されるのであれば自然と設置数増となってしまいます。しかしながら、先ほど申し上げましたような各種リソース不足から、必ずしも実現できない、あるいは実現の経緯で何らかの制限が加えられる、ということになりがちです。

2点目は、設置数の不足による十分な履修機会確保の困難。これは先ほど申し上げましたように、クラスが習熟度別、目的別に細分化されますと、それぞれの細分化された各バリエーションごとの設置数は少なくせざるを得ません。たとえば英語でいいますと、「初級」に該当するような復習クラスは週に3つしか設置できない、あるいは「超上級」は2つしか設置できない、といったようなことになりがちです。そうしますと、学生といたしましてはもちろん他の総合教育科目、場合によっては専門科目との間で、時間割上、干渉する可能性が非常に高くなります。従って、本来取るべき、あるいは取りたい科目を履修する機会が十

分に与えられないという結果に結び付きがちなわけです。

3点目は、難易度、授業形態が異なる科目間で成績評価に整合性を持たせることの困難。これは統一教材や統一テストを用いて成績評価をするわけではない以上、必ずついて回る問題です。

4点目は、履修要件あるいは修了要件を客観化し、明示することの困難。これは3点目と密接に結び付いた問題です。授業形態あるいはレベルを細分化しても、そこに入ってくる学生が履修要件を満たすかどうかを厳密に管理しなければ、クラスを適正に運用できるとは限りません。これは実例に基づいてお話しできますけれども、たとえばかなり高度な内容のクラスを設定したとしまして、典型的には「上級」や「超上級」という名前が付くようなクラスですけれども、そこに入ってくるべき学生は当然のことながら帰国生、あるいはそれに準ずるような英語力を持った者が想定されます。しかし、往々にしてそれとは懸け離れた初級レベルの学生が履修することがあるようです。それは簡単な理由によるもので、ひとつには入口で管理をしていないからです。しかし出口での管理がちゃんとできれば、能力不足の学生はおのずとそういった科目は取りようがありません。しかし、クラスで設定しているレベルよりも懸け離れて下のレベルの学生が履修した場合、教員はその学生には合格点を与えられないだろうと1回目の授業から認識するわけです。その結果、学年が始まった時点、あるいは授業が始まった時点で、実質上不合格、お手上げということになるわけですが、それはさすがにマズイと思う。そうすると実質的には二重学級のようなことになり、その学生に対してはクラスがもともと想定している上級あるいは超上級レベルでの授業および成績評価とはまったく別の次元で

授業および成績評価が行われることになりがちです。したがって履修要件、つまり入口、それから修了要件、つまり出口の基準を客観的に明示し、それを厳格に守ることが、習熟度別あるいは目的別に構成されているカリキュラムをうまく運営するための、あるいはそもそもそれを設置した意図を実現するための要件になろうかと思います。

課題解決に向けた提言

いま言った問題点に関する解決策について、非常に抽象的な形ではございますけれども、提言という形でまとめさせていただきました(図18,19)。まず1点目ですが、「各科目の学習目的を明確化することによって、学習目的の設定を容易にして、自発的な学習計画立案を促す」。これはどうも当たり前のことのように思いますが、こういった事柄を前提に、この後の提言についてもお話しさせていただきますと思います。

次に2点目ですが、「クラスター化した時間割編成と完全セメスター制により、柔軟かつ効果的な科目選択を可能にする」。「クラスター化した時間割編成」というのは必ずしも定着した言葉ではありませんが、先ほど申し上げましたように、細分化された科目構成を採用しますと、学生の履修機会の確保が十分に行われるとは言い難い状況が自然と起こってまいります。それを防ぐための一番簡単な方法は、語学科目に関して時間割編成をブロック化することです。しかしながら慶應義塾、特に日吉キャンパスにおきましては、複数の学部、1,000人単位の学生が教室や時間割を共有します。またそれだけではなく、共通科目に関しては科目履修において、さまざまな学部のさまざまな科目が選択できる余地を残さなくてはなりません。学部単位でブロック化を行いますと、必然的にそのブロックの裏側に入る共通科目などは履修することができなくなります。これは非常に大きな問題でしょう。これを防ぐための折衷案といたしまして「クラスター化」という言葉を使わせていただきました。ブロック化というのはひとつの時間帯、あるいはひとつの曜日に語学科目を集中して設置することです。たとえば文学部の学生が英語を週2コマ履修しなければならない場合に、単純なブロック化であれば、文学部は火曜日と金曜日の3限が英語の時間なので、その時間帯に必ず履修するように、と指定することになります。そういった

大きなブロックではなく、小さなブロック、これをクラスターと呼ばせていただいておりますが、それを用いることが考えられます。たとえば150コマを設置するのであれば、それを数十コマずつに分けて時間割内に分布させる。現在は1コマ単位でなるべく均等になるように分布させたりしているわけですが、そうではなく、部分的にブロック化し、ある程度大きなまとまりをつくった上で1週間の時間割内に分布させていくことによって、学生が希望し必要とする外国語科目の履修機会をある程度確保し、同時に裏側に入ってしまうかねない共通科目の履修機会も同じように確保することが可能になるのではないかと思います。

次に3点目ですが、「外部指標に基づく習熟度・達成度評価法を導入する」。これは先ほど申し上げました問題点のひとつ、習熟度別、あるいは目的別のカリキュラム構成において、難易度や授業形態が異なる科目間で成績評価に整合性を持たせることが困難であるという問題を、客観テストなどを導入して解決していこうということです。これはつまるところ、ある意味では絶対的な評

提言(1)

- 各科目の学習目的を明確化することにより、学習目標の設定を容易にし、自発的な学習計画立案を促す。
- クラスター化した時間割編成、完全セメスター制により、柔軟かつ効果的な科目選択を可能にする。
- 外部指標に基づく習熟度・達成度評価法を導入する。

18

提言(2)

- 「ポートフォリオ」等による、共通基準に基づく記述的な習熟度・達成度評価法の導入を行う。
- 科目履修要件と成績評価基準を明確化・客観化し、科目履修の「入口」「出口」管理を行う。

19

価の導入ということです。また、ここで申し上げている外部指標とは TOEFL や TOEIC のような、すでに社会的に共有されている尺度、およびその前提となっている外部テストを指します。もちろんそういったテストを直接導入することも可能かと思いますが、それだけでは各学部が想定している教育内容を十分に実現することはできないかもしれません。そのための妥協案としては、そういった社会的に共有されている尺度、外部的な指標との相関関係を確認できるような評価基準を客観的に学部内、あるいは慶應義塾内で確立するというのが考えられます。

さらに、いずれにせよそういったテストに基づくような、あるいは客観的な統一基準に基づくような成績評価が難しいクラスにつきましては、たとえば、「ポートフォリオ」のような共通基準に基づく記述的な、つまりこの当該学生は何ができて、何ができないということを記述的に明示するような習熟度、あるいは達成度の評価法が望まれるのではないかと思います。しかしながら、こういったポートフォリオ風評価法の導入に関しましては、ひとつだけ念頭に置かなければならないことがあるかと思いますが、それは既存の評語による、多くの場合は ABCD ですが、そうした評語による成績評価との関連性を確立する必要があるということです。つまり学生の学習の一助として記述的評価法を導入するのであれば、それはそれで自立的なものとして用いることが可能かと思われませんが、同時に従来型の成績評価法を廃止するのではない限りは、必ず並べてそれらを見比べることになります。それがまったく正反対な評価をしてはまずいのはもちろんのこと、相関関係がそれを見る学生ひとりひと

り、あるいは企業の採用担当者などにも分かるようであれば困ったことになろうかと思います。これはかなり大きな課題であろうかと思いますが、必ずクリアしなければならない課題だと思っています。

そして最後に、すでに詳しく申し上げましたが、そういった習熟度別・目的別に細分化されたカリキュラムをつくり上げ、それをうまく運営するためには、科目履修要件と成績評価基準を明確化、客観化し、科目履修の「入口」「出口」を外から見てよく分かるような形で、そして公正な形で管理する必要があるのではないかと思います。私からのご提案は以上です。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。引き続きまして「学部カリキュラムの比較分析」について萩原真一さんからお願いします。

学部カリキュラムの比較分析

萩原真一 ただいまご紹介にあずかりました理工学部の萩原です。「学部カリキュラムの比較分析」と題しまして簡単に発表させていただきます。

調査の目的および方法

私が担当した調査の目的は、日吉キャンパスで文・経・法・商・医・理工の6学部がどのようにカリキュラムを維持・管理・運営しているのかを比較分析しまして、各学部のカリキュラムの現状を把握することにあります。



カリキュラムと言いましても少し茫漠としていますので、この場合3つのカテゴリーに分類いたしました。ひとつは日吉設置学部共通総合教育科目、2番目は必修英語科目、3番目は必修諸外国語科目です。

この調査における総合教育科目とは、日吉キャンパスで学部共通科目として複数学部にまたがった形で設置されている科目を指します。従いまして学部が独自に設置し、他学部オープンにされていない総合教育科目に関しましては調査の対象外としました。それから必修英語ですけれども、これはたとえば理工学部や医学部のように学生全員が必ず必修科目として履修しなければならない場合と、たとえば文学部、法学部、商学部のように学生が英語科目を必修外国語科目の中の一語種として選択履修する場合のふたつがございますが、この調査では両方を含める形で調査いたしました。したがって、必修諸外国語科目の場合は、そこから英語科目を除外した形で調査しました。

総合教育科目に関しましては、すでにご承知のように2004年度の基盤研究報告書が大規模かつ精力的に調査を実施しました。今回の私どもが行いました調査は前回の報告書の成果を踏まえながら、次の2点に主眼を置いて行いました。ひとつは先ほど少し申し上げましたけれども、総合教育科目以外に必修の英語科目と必修の諸外国語科目を対象としたことです。それからもうひとつは、前回の調査がどちらかといいますと科目を主体にして、科目の側面からカリキュラムを眺めるということが主だったと思いますが、今回の調査では学部の観点、学部がどのようにカリキュラムを維持・管理・運営しているのかということからカリキュラムの実態を捉えようと思いました。学部の観点を重視したのは、慶應の場合、



萩原 眞一 氏

我々教員が各学部・研究所に分属した形で教養教育あるいは外国語教育を行っており、それが大きな特色のひとつとなっております。たとえば、東大の場合は横割り組織、教養学部という横割り組織が教養教育、外国語教育を担っているわけですが、そういう東大のL字

目的と背景

- 6学部のカリキュラムの現状を比較分析し、課題を提起する
- 日吉設置学部共通総合教育科目、必修英語科目、必修諸外国語科目を対象
- 縦割りの組織

21

「学部カリキュラムの比較分析」

理工学部教授
萩原 眞一

20

方法

- 学則、履修案内等の資料の収集
- 縦軸に学部名、横軸に比較項目を配置した4つの図表を作成
- 現状が浮き彫りになる比較項目の選定

22

形とは異なり、慶應は先ほど申し上げましたように学部
分属で教育が行われているということが大きな特色であ
ると考えたからです。

当初、日吉の各学部のカリキュラムを比較分析する
という課題を与えられたとき、いったいどのようにして目
的を達成したらよいのか手をこまねいた状態が続きまし
た。というのは、ご存じのように日吉では学部と諸研究
所、部会、教室等の組織の利害や権限が複雑に絡み合っ
ておりますので、カリキュラムの現状把握をするといっ
ても、なかなか切り口が見つからない状態が続いたから
です。そうこうしているうちに合宿の際、ある先生から
図表を作成して比較してみたらどうかというアイデアを
いただきました。それはいい考えではないかと思いまし
て、さっそく飛び付いた次第です。最終的に出来上がっ
てみますと、まだまだ不十分なところはたくさんあるの
ですが、視覚的な効果が発揮され、少しは現状把握をし
やすくなったのではないかと考えております。

具体的にどういう形になったかと申しますと、すで
にお手元にあります報告書の78～79頁（以下、頁数は

2005～2006年度基盤研究報告書『慶應義塾大学の教育
カリキュラム研究—改革への処方箋—』のもの）に「総
合教育科目」があります。縦軸に学部を置き、横軸に
比較する項目を配置した次第です（図23、24）。同様に
80～81頁には「必修英語」（図25、26）、82～83頁に
は「必修外国語（英語を除く）」（図27、28）に関して
比較しました。84～85頁には「共通事項」として、履
修者全員にかかわる事項および必修外国語全体にかか
わる事項を比較する表を別途作成したわけです（図29、
30）。以上のように、合計4つの表に基づいて比較分析
を行いました。

横軸に配しました比較項目は各学部のカリキュラムの
特徴ができるだけ浮かび上がってくるように工夫を凝ら
したつもりです。しかし、ある学部ではすんなり当ては
まる項目が、他の学部ではなかなか当てはまらないケー
スが多々あり、その比較項目の定義づけに苦勞しました。
私自身は理工学部ですので、どうしても理工学部中心の
発想になってしまい、比較項目の選定に大きく影響して
しまった嫌いが若干ございます。具体的な例をあげます

総合教育科目				
	必要単位数	達成条件	設置形態	設置学年
文学部	30単位以上(海外研修科目を含む) 人文社会科学、自然科学、芸術系 系科目をそれぞれ10単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野 から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学20単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	セレクト科目 半期	第1学年から第4学年
経済学部	20単位以上 人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	セレクト科目 半期	第1学年から第4学年
法学部	24単位以上 人文社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	半期	第1学年から第4学年
政治学部	44単位以上 人文社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	半期	第1学年から第4学年
商学部	20単位以上 人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	セレクト科目 半期	第1学年から第4学年
医学部	人文・社会科学4単位以上(選択必修) ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	半期	第1学年
理工学部	18単位以上 自然科学10単位以上、人文・社会科学8単位以上、 ※総合教育科目2単位以上、専攻分野から2単位以上を履修する。	第1学年から第3学年までの履修科目は20単位以上(英語を除く)を履修し、人文・社会科学10単位以上、自然科学10単位以上、芸術系10単位以上を履修すること。また、総合教育科目10単位(英語を除く)を履修すること。	半期	第1学年から第4学年

23

必修英語				
	設置形態	半期1回分のコマ数	半期1コマの単位数	設置学年・学期
文学部	セレクト科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	5段階
経済学部	Study skills 1科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	無
法学部	Study skills 1科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	無
政治学部	Study skills 1科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	無
商学部	セレクト科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	5段階
医学部	セレクト科目 2コマ	1単位	第1学年 第1学期	5段階
理工学部	セレクト科目 1コマ	2単位	第1学年 第1学期	3段階

25

総合教育科目				
	専攻学科等との関係	秋学期科目の追加・削除の可否	教養研究センター設置科目の扱い	外国語教育研究センター設置科目の扱い
文学部	専攻分野により、履修する科目異なる。	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。
経済学部	無	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。
法学部	法律学科 政治学科	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。
商学部	強化プログラムと関係する。	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。
医学部	無	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。
理工学部	無	可	専攻分野により、履修する科目異なる。	専攻分野により、履修する科目異なる。

24

必修英語				
	1クラスの人数	学年全体を対象とした統一テストの有無	教育内容を検討する学部設置機関	非常勤講師の公募の有無
文学部	25名前後	有 (文芸部独自作成のテスト)	有 外国語学部(英語)	原則公募
経済学部	35名前後	無	有 英語部	非公募
法学部	30名前後	有 (書学部独自作成のテスト)	有 英語部	有
政治学部	25名前後	無	有 英語部	非公募
商学部	コミュニケーションクラス: 25名前後 リーディングクラス: 40名前後	有 (TOEIC)	有 英語部および研究教育委員会	非公募
医学部	25名前後	無	有 英語	非公募
理工学部	30名前後	有 (G-TELP)	有 教育研究センター委員会英語教育(先上教員・英語専任教員)	公募(過去2回実施)

26

た。全体ではないにしても多くのところでセクショナリズムといいたいでしょうか、少し言葉が悪くなりますが、たこつば状態が横行しているような感じを受けました。

たとえば、総合教育科目で申し上げたいのですが、理工学部の場合は理工学部が独自に設置している総合教育がございます。この総合教育委員会は日吉の教員と矢上の教員から構成されている学部の正式な機関です。この委員会が科目の改廃や非常勤の人事に関して統括的に維持・管理をしております。予算を持っておりますので予算も執行する権限も与えられております。しかし、78～79 頁にあるように、他学部の場合ですと形式上は学部全体で統括的に管理・運営されているように見えますが、その実態はどうも部門間、あるいは部会間の意思の疎通が必ずしも有効に機能しておらず、希薄あるいは欠如しているような印象を多々受けました。あるいは外国語の場合でもそれは顕著に現れている気がいたします。もちろん外国語の場合は学部によって、語種によって異なり、一概には言えませんが、あえて一般化いたしますと語種の中ではもちろんきちんと会議が行われて意思の疎通が図られ、優れた教育が行われているわけですが、いざ語種を越えた問題に対処しなければならないときは、必ずしも有機的あるいは効果的な意思の疎通が行われて問題が処理されているとは言えないのではないかという印象を持ちました。たとえば、先ほど出ました成績評価に関しましても、語種間で全体的な評価基準、あるいは評価の出し方に関して統一がはかられているとはいえない感じがいたしました。同一学部内のコミュニケーションの欠如をどうするのかということは、学部間の溝をどうするのかという問題とともに、大変に大きな課題ではないかという印象を私自身は抱きました。

最終的にはこうした調査と研究は、提言 27「日吉設置学部共通科目（総合教育科目）のカリキュラムの運営・検討を行う組織、そしてその下部組織である部門・部会が科目担当者の人事に関する調整と各学部に対する提案を行う」にひとえに収斂していく結果となりました。もちろんほかにも提言 8、14、18、19 とも関連いたしますけれども、私どもの調査結果は大きくは提言 27 に関与する形になりました。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは引き続きまして、佐藤望さんから「学生アンケート調査結果について」ご報告をいただきます。

学生アンケート調査結果

佐藤望 ご紹介にあずかりました商学部の佐藤望です。私の担当した部分は、今回の報告書の中で非常に大きな分量を占めます学生アンケート調査についてです。この調査報告については報告書の 71～74 頁、詳細な集計結果のクロス表は 131 頁以降をご覧ください。

調査概要と目的

今回の研究においては、カリキュラムに関して学生がどのような意見を持っているかということについて広範に調査しました。大学のカリキュラムは教員の思いや考えのみのみが強く反映されがちです。これについて学生がどのように考えているか、その傾向を知る必要があると思われるからです。

同種の調査としては学生総合センターが隔年で行っている「大学生生活実態調査」があります。これは生活面や収入面を含めた設問が中心になっていますが、今回はもっぱら学事マター、すなわち履修制度やカリキュラム、



成績、授業評価全般に関して行ったものであります。この種の調査が今回のような規模で行われたのは、おそらく慶應の歴史の中で初めてだと思います。

アンケートでは、次の内容を主に質問することになりました。第1は履修登録やシラバスの問題について、第2は各科目に関しての満足度、レベル別クラス編成の是非、専門科目と一般科目の関係、副専攻制度について、第3は成績評価のあり方、それから楽勝科目といわれているものについて、第4は学生による授業評価について、ということが主な項目でありました。設問の作成にあたっては、あらかじめ各学部から10名の学生に集まってもらって予備的なヒアリング調査を行った後、研究会において設問の検討をし、そしてこの種の調査を専門に行う教員や大学院生からのアドバイスを受けながら修正を加えました。さらには専門の調査会社に調査の実務を依頼し、そこからもさまざまなアドバイスをいただきました。その際、質問が一定の方向に誘導してしまうような結果にならないように、非常に細心の注意を払いました。

今回の調査は、全学部、全キャンパスから無作為抽出で5,000人の学生を対象に行いました（標本率は17.1%）。その結果、1,425名の学生から回答を得ることができ、回収率は28.5%でした。この調査は非常に広範にわたりますので、この中から比較的注目すべき集計結果、意外であった、あるいは当然と言えるけれども、やはりそれが確かめられて意味があったと思われる集計結果について選択し、ご報告いたします。



佐藤 望 氏

1. 調査概要 目的

目的:

・大学カリキュラムに関して学生がどのように考えているか、その動向を知る。

35

・内容

1. 履修登録とシラバスについて
2. 各科目の満足度、レベル別クラス編成の是非、専門科目と一般科目の関係・副専攻制度について
3. 成績評価・楽勝科目
4. 学生による授業評価

36

注目すべき結果とそこから言えること

①シラバスと履修登録について

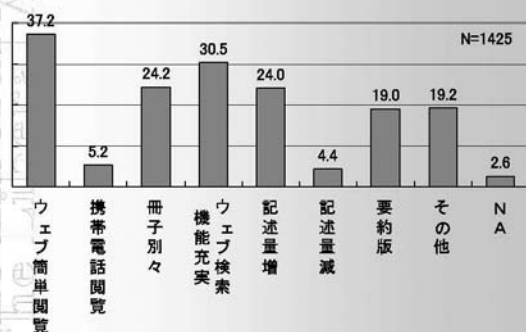
まずシラバスと履修登録についてですけれども、どの授業を選択するとどのような授業内容が展開され成績はなるのか、それから教員の人柄など学生は非常に関心と不安を持っていると思われます。学生は授業の選択の際にシラバスを一番参考にしていると答えています。授業を選択するために時間割以外に何を参考にしましたかという質問に対して、意外だったのですが、シラバスと答えています（図38）。そして、口コミ系の情報を参考にしているという学生が約30%。友人や先輩の評判（23.1%）や、いわゆる『リシュルート』といわれる学生が自主的に作っている冊子を参考にしている（7.4%）という学生です。我々教員は、よく学生がその冊子しか見ていないのではないかと疑っていましたが、意外に数字としては少ない結果が出てきています。それからシラバスは厚すぎて読む気がしない、薄くしてほしいという声がある一方で、個々の記述量を増やしてほしい、情報量は増やしてほしい、でも厚くなるのは嫌だという非常

2. 集計結果から

- 1) シラバスと履修登録について
- 2) 個別の科目について
- 3) 大学で学ぶ教養について
- 4) 副専攻制度について
- 5) 学生による授業評価について

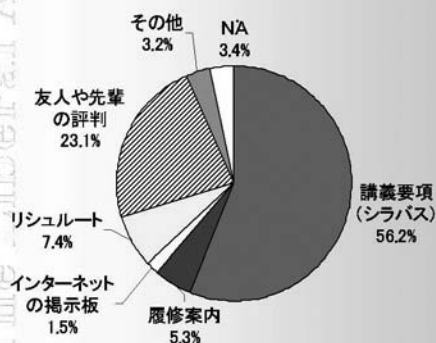
37

問10. 講義要項(シラバス)をあなたはどのように改善すれば良いと思いますか。



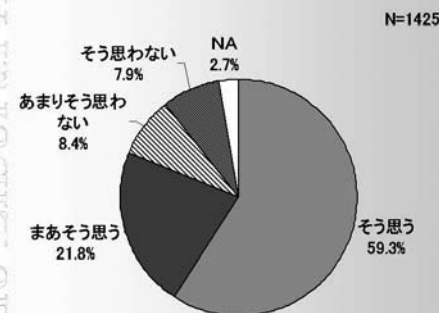
39

問7. 授業を選択する時に、時間割以外で、最も参考にした情報は何か。



38

問13. あなたは、すべてのキャンパスの授業について秋学期開始時に履修登録ができるようにすべきだと思いますか。(1つだけ)



40

に矛盾した希望を持っていることがよく分かります。

シラバスをどのように改善すればいいかということに関して質問をしたところ、図 39 のような結果です。ウェブで簡単に閲覧をできるようにしてほしい、検索を充実させてほしいという要望が強く出されていることがわかります。携帯電話の閲覧というものがわりと高く出るのではないかと予想していましたが、これは意外に低いものでした。これはパケット代が高くなると嫌だということでしょう。シラバスは現在でも、pdf の状態で学事センターのホームページに掲載されますが、少し遅れて出てくるということと、それから pdf は非常に検索がしにくいということが問題です。pdf よりも、もう少し検索がしやすいフォーマットであることが重要なようでした。

それからもうひとつ履修登録に関して、これは Semester 制の問題ともかかわることですが、秋学期に履修登録をできるようにしてほしいという要望が非常に多く出ています (図 40)。「あなたは、すべてのキャンパスの授業について秋学期開始時に履修登録ができるようにす

べきだと思いますか」という質問に対して、80%以上の学生がそう思うと答えていました。このことに関しては後でも述べますし、自由記述のところでも非常に多くの要望が寄せられています。

②個別の科目について

個別の科目について聞きました。個別の科目に関して、満足度、レベル分けやクラス編成、共通教材の是非、改善点、楽勝科目の問題等について聞きました。これは個別のクロス表を見ていただければよいと思いますが、すべての科目に関して満足度を聞いてみました。これはわれわれ慶應スタッフがやや安堵してもいいのではないかと結果が出ています (図 42)。つまり、すべての科目に関して半数を超える学生が満足、もしくはどちらかといえば満足と答えています。慶應大学というのは学生にとって非常に満足度の高い大学だと言うことができると思います。

しかしながら個々のデータや記述式の回答を見ると、やや楽観できないデータもたくさん出てきています。「授

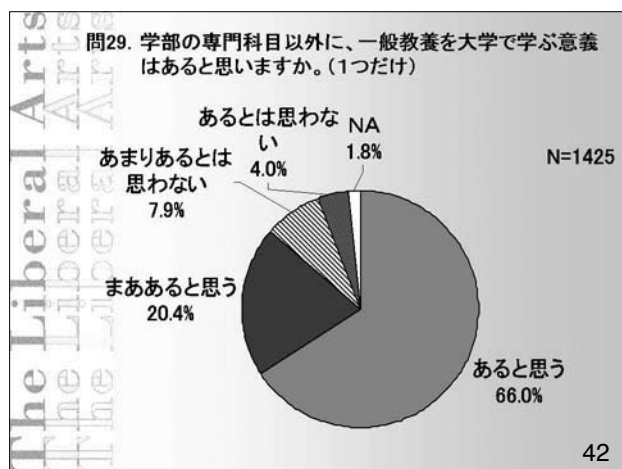
	満足計	不満足計
英語	52.2%	40.0%
英語以外の外国語	71.2%	20.8%
総合教育科目	63.4%	33.8%
少人数セミナー	82.9%	14.4%
学部専門授業	72.1%	27.2%
ゼミ	78.7%	18.9%

各科目群の満足度(学生アンケート調査より)

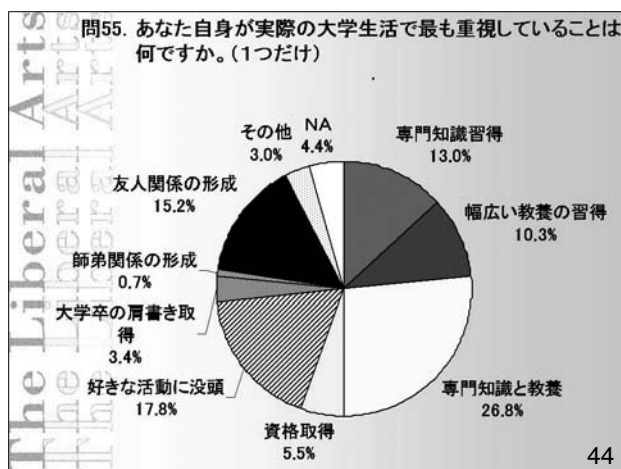
41

大学に対する満足度		
	満足計	不満足計
慶應義塾大学の学生であることに	92.0%	7.6%
慶應義塾大学に	84.4%	15.2%

43



42



44

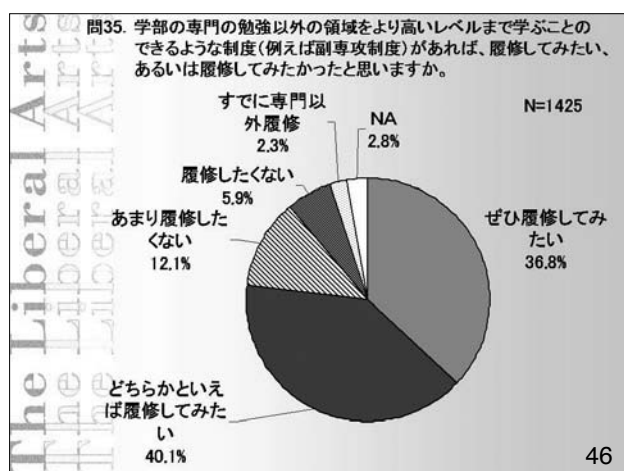
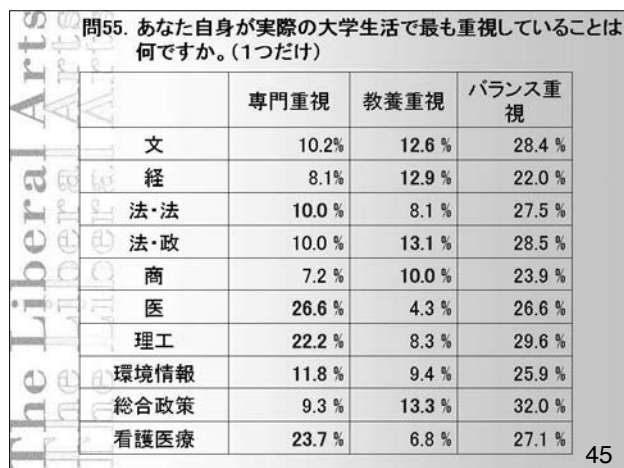
業の改善はどういうふうにしたらいいか」という質問に対しては、「希望した授業が履修できない」「クラスによる負担の差が大きい」「目的・内容を明確化してほしい」「難易度を明確化してほしい」「教え方の技術を何とかしてほしい」など、学生が不満に思っている回答も多く寄せられています。「満足か」と聞かれれば「満足」と答えるわけですが、だからと言ってこれでいいと思っているわけではないということを学生の答えから知ることができます。

③大学で学ぶ教養について

それから次に、これは教養研究センターの調査でもありますから、大学で学ぶ教養について重点的に聞いてみました。今回の調査では一般教養を学ぶことの意義についても質問をしました。問29で、「学部の専門科目以外に、一般教養を大学で学ぶ意義があると思いますか」と尋ねましたが、86.4%の学生が「ある」もしくは「どちらかといえばある」という回答をしています。教養センターの調査でしたから、やや「ある」の方が高く統計的

にはたぶん出るのだろうと思いますが、これだけの高率の数字は十分に有意であるという判断をしていいと思います。

それから問55で、「あなた自身が実際の大学生活で最も重視していることは何ですか」と尋ねたところ、「専門知識と教養をバランスよく身に付ける」という答えが一番多くありました。それから「好きな活動に没頭」「友人関係の形成」など、昔ながらの伝統的な気質を重視する学生も一定割合いるということで、私は個人的には、ややほっとする結果だと思っています。「師弟関係の形成を重視する」というのが0.7%で、悲しい結果が出ていますが、これは単数回答でしたから、これを複数回答にするともう少し高く出たかもしれないと思っています。また、「専門を重視」「教養を重視」と回答している学生も一定割合いて、これは学部によって傾向がかなり違うということが分かっています。このことに関しては、大学で一番重視することは何かという単数回答の中で見た結果ですから、一概にこれから判断することはできませんが、大学で学ぶのは教養だと答える学生が



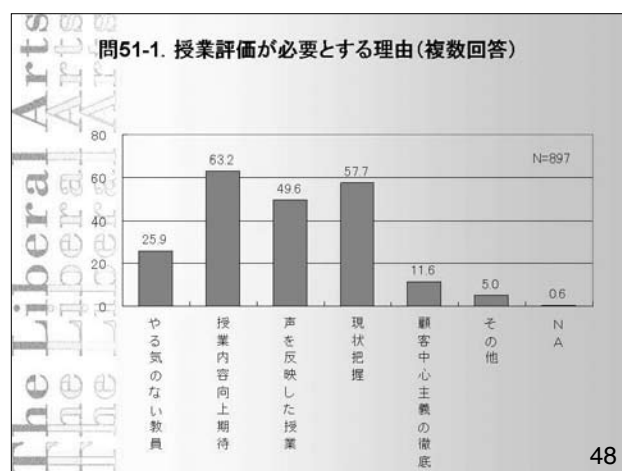
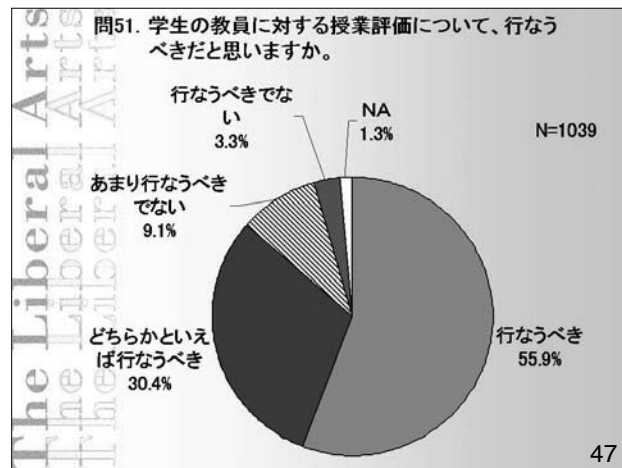
文、経、法学部政治学科、商学部、総合政策にやや多いです。大学で学ぶのは専門性だと考える傾向は、やはり理系の学部、医学部、理工学部が非常に強く、看護医療学部も強いです。それから法学部も法律学の方はそうだということがわかります。

④副専攻制度について

それに加えて副専攻制度について尋ねてみました。「学部の専門の勉強以外の領域をより高いレベルまで学ぶことができるような制度(たとえば副専攻制度)があれば、履修してみたい、あるいは履修してみたかったと思いますか」という問に対して、「ぜひ履修してみたい」は36.8%、「どちらかといえば履修してみたい」は40.1%、合計76.9%の学生が履修してみたいと答えています(図46)。これもやや意外に高く出た数字だと思っています。我々の予想よりもかなり高い結果でした。

⑤学生による授業評価について

それから「授業評価について行うべきですか」という



質問に対して、「行うべき」は55.9%、「どちらかといえば行うべき」が30.4%と、予想通り圧倒的多数と言ってもいい学生が、とにかく先生の評価もしろ、先生の成績も付けろと言っていることが分かります(図47)。その理由といたしましては、授業内容の向上を期待している、あるいは現状を把握してほしいという回答が非常に多く、あるいは我々の声を反映した授業をやってほしい、あるいはやる気のない教員がいるなどの理由を答えています。

以上が集計結果ですが、全体として言えるのは、慶應大学の学生は非常にまじめであり、我々のカリキュラム上のメッセージを非常に真摯に受け止めているという印象を得ることができると思います。それから満足度も非常に高いと言っていることができます。

⑥自由記述欄について

アンケート設問の最後に自由記述欄を設けて、「勉学生活の充実のためにカリキュラムや授業に関して今後どのような改善を望むか、またどのような授業を望むか自

3. 自由記述欄について



由にお答えください」という質問を行いました。そこに全体の半数以上の回答の 824 件に何らかの記述がありました。この内容は非常に雑多で、中にはかなり自分勝手な意見もあります。しかし、現在の慶應大学が抱える問題を非常にうがった鋭い指摘も数多く見ることができました。残念ながら報告書に載せることはできませんでしたが、これに関しては今回、内容ごとに切り分けてデータベース化しております。このデータベースをいまここでお見せいたします。これは何らかで先生方が必要なときには参照できるようにデータ化して教養センターで保存していますので、事務室の方に行っていただければ、これをいつでも先生方にお見せできるように用意しております。

たとえば、「抽選」の項目を選んでみますと、多数の要望が寄せられていることがわかります。例をあげると、「抽選したにもかかわらず、出席者が少なく空席が目立つのはやめてほしい。出席を取るか、大教室で授業を行い、抽選をなくす措置を取ってほしい」。非常にもっともな内容です。あるいは「成績」という項目を選んでみると、同様に数多くの要望が寄せられています。たとえば、商学部 4 年生の自由記述回答ですが、「授業内容には満足できても、その成績の評価が甘いとよくないと思います。私にとって単位を取ることはまじめに授業を出席し、試験を受け合格点を取ることが基本だと思っていますが、そう思わない生徒も多く見られます。このようなことがあると授業にまじめに出席することが非常にばからしく感じてしまいます。試験に関しても、過去と同じや似たようなものを出し続けると、まじめに勉強するよりも過去の問題を試験前に丸暗記した方がよい成績が付いてしまうシステムにも納得がいきませんでした」と

4. 提言との関連

- 提言 11
－紙媒体の講義要項は最小限にし、数年かけて電子媒体のシラバス公表システムを開発すること

50

4. 提言との関連

- 提言 8
「秋学期にも履修登録が可能なセメスター制度を実施すること」
- 提言 9
「授業をレベル分けし、授業の達成目標を明確化し、順次高いレベルに進むことを誘導するシステムを作る積み上げ型のセメスター制を作る」

51

いうことが記入されています。

必ずしもこういったまともな意見だけではなく、かなりひどいものもありますが、中には非常に我々が考えられる参考になる意見も決して少なくないということをご報告したいと思います。これは冊子にはなっておりませんので、何らかのときに学部の先生方で、あるいは部会で必要な場合には、いつでも提供できるように用意してありますので、ぜひ活用していただきたいと思います。

調査結果と提言との関連

今回行った 28 の提言は、そうした学生の声に後押しされたものが多く含まれています。提言の 11 から 13 はシラバスに関することですが、「紙媒体の講義要綱は最小限にし、数年かけて電子媒体のシラバス公表システムを開発すること」を提案しています。電子媒体のシラバスは検索しやすくすること、さらにこれを時間割作成の機能と関連づけて、さらにクラス編成のシステム化とも組み合わせることも提案しています。もちろん、これはそん

なに簡単にできないことも認識していますし、かなり慎重にやらなければいけないことでしょう。しかし、時間がかかりますけれども、段階的に前進させていくことは非常に重要だと考えています。とりわけクラス編成や抽選の問題は、科目設置母体の組織化が整備されて初めて可能になることであります。これに関しては座長の伊藤行雄先生が詳しく提案してくださると思います。

今回の提言8では、「秋学期にも履修登録が可能な完全なセメスター制度を実施すること」、提言9「授業のレベル分け、授業の達成目標を明確化し、順次高いレベルに進むことを誘導できるシステムを作る積み上げ型のセメスター制度をつくること」を提案しています。秋学期の履修登録ができないことに関して学生は非常に高い不満を抱えています。ただ報告書の中でも述べたように、通年制にはじっくりと1年かけてひとつの分野に取り組むことができるという大きなメリットがあります。セメスター制にするとそれがばらばらにされ、学生が安易な履修に走る恐れがあります。これを払拭しなければ完全セメスター制をとっても教育効果が上がらないのではないかと思います。セメスター制度は、レベルの決定をきちんと行い、ひとつの分野を継続的に積み上げる授業体制が整ってはじめて意味があります。したがって、各授業を100番台、200番台、300番台のようにレベル分けし、それを順番に積み上げ履修しなければいけないというカリキュラムを組むと、単にばらばらに数合わせだけをやるだけの履修行動を避けながら、より高度な専門と深い教養を追究していくようなシステムができるのではないかと。そういうことを提案しています。

またさらには、このようなレベル分けされた授業を副専攻制度と結びつけることも、今回の提言の大きな目玉です。アンケート調査では副専攻制度について非常に肯定的に考える、あるいは自らやってみたいという学生がこれほど多いことは当初予想していなかったことです。また多くの学生が早く教養課程を終わって、三田で専門を学びたいと考えているだろうというのが、日吉の教員の常識のようなところがありました。しかし、アンケートの数字では決してそうではないということを物語っています。つまり言ってみれば、慶應の学生は単なる職業的な知識・技能を身に付けようとしているわけではなく、また役に立たない虚学の教養と役に立つ実学を単純に二項対立させるのではない、本当の意味での「実学の精神」

が伝承されているのではないかというふうに言うことができます。

もちろん学生が要求しているからといっても、その通りすべきだということを主張するつもりはまったくありません。しかし、今回のアンケートに答えた学生は非常に真剣に大学の現状を見つめています。またこれは、彼らの慶應大学に対する帰属意識が非常に強いということも関係していると思います。我々教員が普段見落としがち側面も、このアンケート調査は指摘してくれています。

そういう意味で、将来の社会のリーダーを育てる役割を担った慶應義塾は、学生が何を求め、何をしようとしているかということを、学生の声に常に耳を傾けながら真剣に考えることは非常に重要であると考えます。私の報告は以上です。

司会 ありがとうございます。報告の最後になりましたけれども、再び教育カリキュラム研究の座長・伊藤行雄さんにご報告願います。

日吉共通科目カリキュラムを運営する組織の設立について

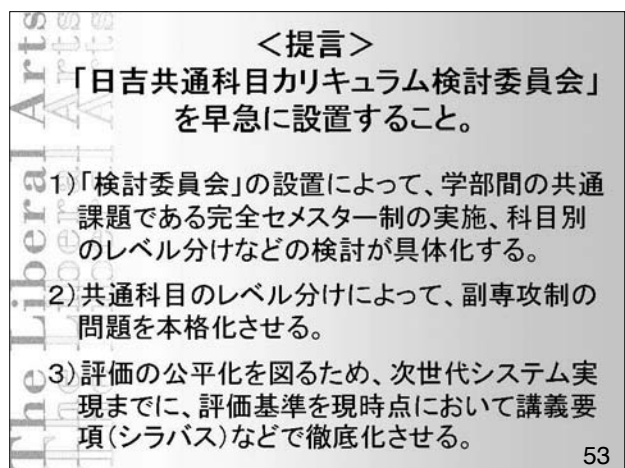
伊藤 最初のところであまり述べない方がいいと思い、話を短くさせていただきましたが、最後の提言というところでもう一度繰り返したいと思います。いま、報告者からいろいろな問題点を提言いただき、さまざまな分析も行っていました。提言自体も28にも及ぶ膨大なもので、これをひとつひとつ取り上げて実現していくには相当時間がかかります。また、当然、受ける側の学部や先生方によって違う考え方もあると思います。そこで、28を2～3にまとめるのはとても難しいのですが、差し迫って一番必要であることは、日吉主任会議からも提案されている日吉設置学部共通総合教育科目のカリキュラム検討委員会を早急に設置することではないかと思っております。

この課題については、実は1980年代から議論に上っていました。各学部が共通の科目の授業をやりながら内容については何をやっているのか分からない。学部内でも十分わかっていない。それから設置科目の決定についても、どういう手順で、どの時点で決定するのか。実際は空欄を埋めていくようなもので、つまり内容を検討した結果ではなくて、ただ科目名に担当者名を埋めていくというようなことがいまだに続いている状態です。

先日、大学教育委員会でもお話しさせていただいたのですが、1991年の大綱化の後に、1992年1月から1993年3月まで計11回にわたって、「大学教育検討問題委員会」という会議が開催されました。これは石川塾長の下で行われた会議で、「大綱化に関して、専門と一般教育はもう境目が無い。ですから皆さん、ご自由にご議論ください」というものでした。その中でやり始めたことは、各学部が学部ごとに改革に走ったのです。走った結果、どうなったかという、ばらばらになってしまいました。それまではやや人文・社会・自然というやんわりとした形でできていた総合教育科目が、たとえば経済学部ですと7系列ぐらいまでに分類されたり、ほかの学部ではいろいろ科目名を変えたりするなどの事態に陥りました。先ほど萩原さんがおっしゃっていましたが、理工学部では独自の新総合教育科目を立ち上げ、そこに総合教育委員会をつくり、独自の展開を始めました。

このころはすでに日吉の方では総合教育科目を検討する研究会がつくられ、いろいろ話し合いが行われていました。その中でひとつは鳥居塾長就任後に大学教育委員会——大学教育委員会というのは、その前にあった一般教育委員会が改組した形で、鳥居塾長の時代からスタートした委員会です。これはいま、西村理事が議長となって続けられていらっしゃいますが、総合教育科目のカリキュラムについての検討を行う場面としては大き過ぎる





のではないかと考えています。

一方、1993 年ごろ、一般教育委員会の下に日吉カリキュラム調整部会がつくられました。これは先日退職されました湯川先生が座長となり、カリキュラムの検討を行う組織の設置を検討しました。そして、その結果をもって「日吉カリキュラム調整委員会」を設置するという上申書を大学教育委員会に提出しております。これは記録が残っております。その後、大学は来往舎問題や大学教養研究センター設置、文科省からの委託研究など、いろいろな問題が絡んできまして、学部カリキュラムそのものを見つめるということから遠くなってしまいました。そこで、前回の基盤研究でそこをもう 1 回やり直すという形で元に戻って、今回、このような分析をしたわけです。

図 53 に書きましたように、まず「日吉共通科目カリキュラム検討委員会」をつくるということ。これがすべてのスタートだと思っています。そうした日吉キャンパス全体の組織が設置されないと、我々の基盤研究はあくまでも研究、素案づくりの域を出ません。我々の出した成果を学部にあげて検討してもらおうというだけではなく、ある程度オーソライズされた形で検討されていくことが一番望ましいのです。そうやってこそ、はじめて各学部間の共通問題である完全セメスター制の問題や、佐藤さんがおっしゃっていた科目のレベル分けなどの問題が具体化します。

これはすでに先ほども言いましたように、商学部や法学部、あるいは経済学部などでも、いろいろな試みが行われて、少人数セミナーから研究プロジェクト、PCP、法学部の副専攻制度など、より効果的に行うにはやはり大学全体と学部カリキュラムとの連動性を持たせなければ

いけない。

さらに私事で恐縮ですが、経済学部の「研究プロジェクト」を担当していますが、現状ですと学生に対して総合教育科目の指定された科目を取りなさいという強制力はないし、それが制度的にきちんと決まっているわけではない。ですから、それをある程度カリキュラム検討委員会の中で整理し、「こういうプロジェクトあるいは専攻を取るならば、こういう科目は最低限取っておきなさい」ということが言えるようなレベル分け、それは佐藤さんがおっしゃったような 100 番台、200 番台というような番号を付けることでも実際可能だと思います。そういうものを積み重ねていくということもカリキュラム検討委員会で議論できるのではないかと思います。

そして、その上で副専攻制度を確立していけばいいのではないかと考えています。副専攻制度に関しては大学や学部、個人によってずいぶんいろいろな考え方がありますが、分かっていますが、私個人としては教養系副専攻というものを将来的につくっていったらいいのではないかと考えています。それは慶應独自のものかもしれませんが。

図 53 の 3)「評価の公平化を図るため、次世代システム実現までに、評価基準を現時点において講義要項（シラバス）などでもっと徹底化させる」。萩原先生や村山先生の調査をお手伝いさせていただいたのですが、評価に関しては講義要項の中でも非常にあいまいに書いてる人が多いのです。かなり学事センターなどがきちんと項目立てをしてくださっているにもかかわらず、書かない人がいるなど、そういう問題が結構残っています。ですから、まず次世代システムを構築する過程においても、必ず講義要項をもっと有効に使うということ、そこら辺

のことも重要ではないかということです。これは日吉カリキュラム検討委員会と直接結びつくものではないのですが、そういうところを徹底化させることによって、学生の科目選択の方向性がはっきりしてくるのではないかと思います。

少し手前みそですが、いまそこに研究プロジェクトの立ち上げに加わった経済学部福山欣司先生たちがいらっしゃいますが、大変な思いで進めてきてくださいました。つまり、経済学部の研究プロジェクトは、先生方が論文を共同で審査し、学生は全員で年2回発表し、その成果(論文)を学内LANで公開することが前提で進められています。これを副専攻として変えていくことが本当にふさわしいかどうか議論が必要と思いますが、実際3年生で3万〜5万字ぐらいのかんりのレベルの論文が書けることが非常にはっきりしており、卒業論文がそのあとになるといった学生も少しずつ増えて来ています。こうした成果を有効にするためには、ぜひもっと副専攻にふさわしい科目を早い段階で履修してほしいということです。そのためにも「日吉共通科目カリキュラム検討委員会」をできるだけ早く設置していただきたい。これは理事にお願いすると同時に、各学部をお願いしなければいけないことだと思っております。以上でございます。

司会 ありがとうございます。これでひとまず報告の部が終了いたしました。予定より少し時間が押しておりますので、引き続きディスカッションに入りたいと思います。まず座長のご報告に絡めて、朝吹亮二・日吉主任代表に一言お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

朝吹亮二 法学部日吉主任の朝吹です。座ったまま失礼いたします。本日のご報告はいずれも面白く興味深く、いずれについてもコメントをしたい気持ちですが、時間の関係で最後に伊藤先生がお話しされたことに限ってコメントを付けさせていただきたいと思います。

私は現在のカリキュラムのあり方は、伊藤さんが非常にうまくまとめていただいたように、90年代以降、私もちょうどそのころ学習指導をやっていたのですが、確かに学部の中でカリキュラムを改革しようという動きがどこも活発になりました。法学部でも、それ以前は1〜2年が主に一般教育課程、3〜4年が専門課程というふうに、学年別で分かれていたものが取り払われ、1年から4年まで現在でいう総合教育科目が勉強できる、外国語も勉強できる、逆に専門科目も1年から4年までずっと勉強できるという改革をもとに、法学部なら法学部でこういう総合教育科目があればいいのではないかと、こういう外国語教育のあり方がいいのではないかと散々議論して、現在行われているようなカリキュラムの基礎ができたわけです。ですから、たぶんそれは各学部1年から4年まで、つまり入学から卒業、あるいは卒業後も視野に入れて、4年間のプログラムをかなり真剣に考えて組み立てられているような気がいたします。法学部で言うと、それまで英語だけにあったインテンシブコースを専任者のいる全ての外国語に設置。「地域文化論」を各語



朝吹亮二 氏

圏に対応。そして、日吉の専任者の専門に対応する少人数セミナー形式の研究会の充実。以上のようなカリキュラム改革でした。そして、こうした改革は各学部でも行われました。

共通科目として横に開かれていた科目が、学部ごとの改革が行われた反面として、少しなおざりにされてきたという側面は確かにあります。ちょうど教養研究センターの設立、あるいはこの来往舎が建てられたときに、前の日吉主任会議の座長であった西尾さんを中心に、特に少人数セミナー科目などをどんどん学部の壁を取り払って相互乗り入れできるようにしようという動きが始まって、現在の日吉主任会議ではその流れを引き継ぎ、いろいろ検討していきたいと考えています。

この提言のカリキュラム検討委員会と、最終的な日吉主任会議の案としては、必ずしも総合教育科目に限定しないで、たとえば外国語科目を含めてすべての科目を検討できる、むしろ私はこれが良いのではないかと認識しておりますが、日吉共通科目カリキュラム検討委員会をぜひ立ち上げたい。後でご発言いただけるのだと思いますが、西村先生に日吉主任会議からおおよその組織の案などをすでにお示ししました。学部の中のカリキュラム改革はかなり進んでおりますので、それと並行して、総合的な科目間の調整をぜひ具体的にできる組織が欲しいというのは、日吉主任会議でも切実に思っていることです。これに関しては私もまったく伊藤さんと同じ意見で、ぜひ実現していきたいと考えております。取りあえずはこのような発言で一応終わりにいたします。

司会 ありがとうございます。事が進んでいくようないいムードが期しているというのは私の個人的な感想だけでしょうか。それでは、西村常任理事にもお話を伺いたいのですが、いま話題になっていることも含めて明確なというのではないですけれども、是非ともお話をいただきたいと思います。

西村太良 どうもありがとうございます。今回のカリキュラム研究という基盤研究の報告書は非常に画期的なものだと思います。佐藤さんのお話にもありましたように、これだけの規模の学生アンケートを全学的にやり、

しかも抽出のやり方も非常によく考えられたやり方で、アンケートの内容についても注意深く行われている点では非常に信頼のできる調査だと思います。

こういうものに基づいてご提言をしていただけると、やはりこれを実現していくプロセスも非常にやりやすくなるのではないかと思います。これはぜひ、先ほど少しお話がありました大学教育委員会でご報告していただきたいと思います。この委員会は、もともと伊藤さんのご説明のように一般教育委員会という形が大学教員委員会という形に変わったわけですが、変わった時点で単に一般教育だけではなくて、大学全体の教育の問題を話し合う場ということで位置づけられたというふうに理解しています。実際たとえば語学科目の共通化など、いくつかの点については成果をあげています。

ご記憶にもあるかと思いますが、私の前任者の黒田さんのときに大学教育委員会ではシラバスとセメスターと GPA の3つについて小委員会をつくり、各学部で検討していただきました。私も当時文学部で検討させていただきました。シラバスは現状のような形で、これをシラバスと呼ぶべきかどうかということについてはいろいろご意見もあるかと思いますが、一応そういう方向に向かいつつあると思います。前に比べれば多少透明性が高まったかとは思いますが、利便性などで問題がありますのでご指摘の点、特に学生の方のご意見はできるだけ実現していきたいと思います。

セメスター制についても、これは一応形の上で、つまり通年半期制を認める形で、カリキュラム上はセメスター制に移行になりました。形式的には全学部がセメスター単位で科目を設定できるような形になってきております。これを出発点として完全セメスターがいいのか、あるいはいわゆる学年制との問題もありますので、各学部のご意見も尊重しながら進めていかなくてはいいかと思っています。

もともとセメスター制のメリットを生かすためには、ご指摘のような秋学期の履修申請が必要になると思います。その先に秋入学や卒業があるかということになるのですが、これについてはやはり各学部のご意見もあるかと思っています。ただ部分的にすでにお気づきかと思いますが、共通学則がずいぶん変わっておりまして、た



西村太良 氏

たとえば卒業要件の4年間在籍はすでになくなっております。3年間在籍で卒業ができます。したがって、3年半で卒業単位数を満たせば飛び級等を使って学士を取り、かつ修士に進むことが可能な形にはなっています。ただ対応はそれぞれ学部によって任されていますので、現状でそれを生かすかどうかは学部の判断に委ねられています。商学部等では、すでにお考えだというふうに聞いております。

それから一方で、秋入学ということにつきましても、いわゆるニューヨーク学院等、あるいは留学生の秋入学ということについても検討は進んでおりますので、これも近いうちに実現するのではないかと思います。ただこの場合、3年半で卒業するのか4年で卒業するのかという問題は残されていると思います。

一番問題になったのはGPAで、今日も話題になりましたのが成績評価の問題ですが、GPAというのは基本的に相対評価ですので、この学生アンケートのご意見を見ますと、やはり学生は絶対評価を望んでいることが分かります。絶対評価を78%が希望しておりますので、やはり学生は相対評価に対して一種の不信感を持っているのではないかと印象を受けました。これについては実際GPAが非常にうまく機能しているところもありますので、その実態というか、相対・絶対という評価の

やり方自体をあまり学生が正しく理解していないのではないかという気もしますが、これは非常に興味深く思いました。

一方で、授業の評価について86.3%の学生がやるべきだと考えている、あるいは質問制度、成績評価についての疑問に対して答える制度的な対応が足りないというのが86%ありますので、これはやはり学生は全体として成績に対する不満は少ないけれども、その根拠についてはかなり問題視しているということのほうがわかります。

こういうところが今回の学生アンケート調査でほぼ全学部共通でした。私はこの点を非常に面白く受け取りました。日吉、三田の学生の意識の違いはあまりない、それから学部の差もあまりないということがあって、かなり全般的な学生の意識というものがあるような気がいたしました。以前に文学部で調査したときには日吉と三田でかなり、たとえば成績評価に対するプラス・マイナスという意見が内容的に違っていて、日吉は甘過ぎる、三田は厳し過ぎるという意見がありました。成績に対する不満も、自分はこれだけ勉強しているのに、勉強していない学生の成績がよすぎるという不満と、私はこれだけ勉強しているのになぜこんなに低い評価なのかという両極端といいますか、全然内容的には違うのですが、不満がそれぞれあったように記憶しております。

最後のご提言のところですが、私は先ほどの伊藤さんの概観というのは非常に素晴らしいものだと思いますけれども、あえて付け加えるとすれば、教養研究センター立ち上げのときの羽田さんを中心とした研究会でのコアカリキュラムの策定です。これは慶應の教養教育のモデルの方向性を全体的に示したものだと思います。広い意味ではコアカリキュラムといいますか、そのときの方向性に沿った形で日吉もやはり教養教育の改革が進みつつあるように思います。

一方で、やはり大綱化のときに慶應義塾は全体として保守的な動きを示したと思います。つまり、ほかの大学は大綱化によって教養教育をできるだけ縮小していくとか、専門教育を強化していくという方向に動いたのに対して、慶應はどちらかというと教養教育の部分を残そうという形で、できるだけ変えない、あるいは拡大するという反応を示したのです。それが結果的に見ますと、

いまになってやはり教養教育は必要である、あるいは総合的な教養教育、そういう声がむしろ学外から強まってきているという状況になっているところがあると思います。この特色を生かすべきだと思います。それを踏まえて今回、こういう大きく3つの提言をいただきまして、この検討委員会につきましては、これは皆様のご指摘の通り、あるいは前々からこういうものが必要だということとはすべて共通している認識だと思います。

これも皆さんご存じの通り、やはり日吉のカリキュラムの特殊性というのは、横と縦の組み合わせになっていることです。カリキュラムというのは基本的に学部単位でできている。一方で、カリキュラムの構成全体の枠組みは日吉という枠組みでできているという構造があります。したがって日吉全体の枠組みを変えるためには、学部のカリキュラムを効率的に変えなければいけないということがあります。その意味ではやはり大学教育委員会等で各学部のご理解を得た上で、こういう委員会が十分機能できるような地盤をつくる必要があると思います。

あと副専攻ですけれども、これは現状でも、各学部でかなりそれに近いものを作られていると思います。問題は副専攻と一口で言ってもいろいろなレベルがあって、経済学部のように研究会で卒業論文的なものを書かせるというところから、あるいは4科目ぐらいの科目をグループとして取ることによって認定書を出しているところまで、いろいろあります。私は前に全国の大学の副専攻のシステムのデータを調べたことがありますけれども、ほとんどはやはり科目群の履修によって認定を与えるという形が多いように思いました。学部横断的な副専攻はどの大学でもほとんどすでに実施されています。慶應ではまだ系統的にそういうことは十分できていないので、もしやるのであればやはり形式的なものではなく、実質的にそれが学生の希望も高いということもありますから、レベルの高い形での副専攻制といったものを実現していければと思います。もうひとつの問題点は副専攻制をやりましたら教員の負担が非常に増えるということがあります。これはやはり授業担当、あるいはカリキュラムの問題とも関係してくると思いますので、それを含めて検討する必要があると思います。

あと評価システムですが、授業評価につきましては

GPAをやるにしても、何をやるにしても、成績評価のある意味での平準化というものが無いと意味がないと思います。ただ一方で成績は担当教員の責任で行われるべきものですので、これをある外形的な枠組みの中に押し込めるということも危険であるような気がします。一方で授業評価につきましても、前に大学教育委員会でお話をいただきましたが、いずれもこれはいわゆる教員評価にはつながらないということを前提として、学生のアンケートでもいわれていたように、授業内容の向上という目的のためということを明確にすれば、ある程度機能するのではないかと思います。以前、大学基準協会の認証評価のときにもやはり授業評価を全然やっていないのではないかとのご指摘はすでに受けておりますので、何らかの形でこれはご理解をいただきながら進めていく必要があるのではないかと思います。

すべてこういうものは、そういう評価項目等を満たしている、あるいはそれに丸印を付けるためにやるのではなくて、自主的に学生の教育の益になるということ、あるいは教員それぞれにとってマイナスにならないということが前提になると思います。そこら辺は慎重にやる必要がある部分もあり、かつ早くやらなくてはならないということもありますので、今回のこの提言といったものを改めて大学教育委員会に取り上げ、できるだけ早くこれを実現していきたいと思います。

カリキュラムの次にはやはり人事ということになるのではないかと思います。人事につきましてもかなり学部の専権事項に属しますので難しいかとは思いますが、将来的にはそれも必要になってくるのではないかと思います。だいたい私の方から以上です。

司会 ありがとうございます。それでは、これからあと残り時間があまりございませんけれども、せっかくだらしていただいた会場の皆様からのご意見、ご質問を承りたいと思います。できるだけ多くの方にご発言願いたいと思いますので、ご発言は要領よくお願いしたいと思います。お名前とご所属をお知らせいただければと思います。どなたかおられますか。それでは羽田さん。

羽田 功 どうも興味深いご報告を聞かせていただきあり

がとうございます。その後、朝吹さん、それから西村理事のお話もいろいろな点で参考になったと思います。その中で今日、伊藤先生、あるいは萩原さんも言われていた、いわゆるカリキュラム検討委員会を特に日吉の共通科目について設置すべきだということについてです。私はいま、経済学部の日吉主任をやっている関係もあるので、日吉主任会議としてもお願いをしていますので、それが秋の大学教育委員会でおそらく次のステップに入らうという西村先生のお話を聞いて、心強く思っています。

この報告書と萩原さんのお話の中で、いわゆる学内の、特に学部の中の壁という話がありました。それは要するに、たとえば経済学部で言えば、三田の教員が主に担当しているカリキュラムと日吉で展開しているカリキュラムとの間の壁をつくっている、ある種の意識の違い——つまり日吉の教育をどう捉えるか、どう位置づけるかということに関しての共通の理念や理解が必ずしもないのではないかということ言われていたと思います。これは実は僕自身も実感しているところで、日吉の方での教養研究センター等を含めて、いろいろな形で教養教育の重要性は議論してきていると思いますが、それは三田等を含めて全学的にどれぐらいの共通認識になっているか。これは先ほど西村先生からそういった委員会をつくる場合には、たとえば大学教育委員会等である種の基盤をつくった上で滑走をしやすくする。ある種の了承に理解を得た上でやっていくべきだろうということをおっしゃっていましたが、その通りだと思います。実質的にそれをやるときに、たとえば大学教育委員会で認められたけれども、結果的には日吉中心でまた何となくちまちました感じでまとまってしまっているみたいな形でできてはいるけれども、あれは日吉の問題だという位置づけになってしまっはまずいと思います。

図 30 に立教の全カリのことがちらっと入っていましたが、大学の大綱化の後に国立大学の多くが取り組んだのが、一言で言えば「全学出動」という言葉を使って、少なくとも意識の上で大学全体の取り組みに対しての共通認識、意識の共有化を図ったわけです。実態はいろいろあると思いますが、少なくともそういう方向性を大学が持って、その中でたとえば今回つくられるであろう検

討委員会等が位置づけられていく。このプロセスを経ないと、言葉はよくないですけども、先ほど言ったような形で、またいずれ数多くある委員会の中のひとつとしてどこかに埋没しかねない。それだけは避けるべきだろうという気がします。

その辺に関して今回、基盤研究でそのあたりのところはこういった調査を基にして、何かご議論されたのかということをお聞きしたいと思います。これはぜひ西村先生にお願いしたいのは、そういった形で大学教育委員会などでも位置づけを全学的なものの意識の共有化の上で何とか認めていただくといった形の進め方をさせていただければという、これは希望です。以上です。

伊藤 いまの意見ですが、立教大の場合はかなりドラスチックに改革を進めたわけですけども、慶應義塾は長い伝統の上に学部制が敷かれており、その中で西村理事などは大変苦勞されていると思うのですが、一応この問題は取りあえず「日吉の問題」という形でスタートした方がいいというのがひとつの戦略なわけです。つまり、これを一挙に全学的にやることは、いままで慶應義塾の改革の流れの中で大綱化以降必ずしも良い制度が設置されたとはいえない状況ですから、その中でまず実現可能性があるのは、(各) 学部で正式にオーソライズされた新組織をつくることだと考えています。各学部も、全体にもそうした組織が必要であるという認識の前提に立たなければいけない。

つまり、私の感じでは今後、各学部でワーキンググループがつくられることを期待しています。こうしたグループが結果的に、まずは日吉のカリキュラムをよくすることから出発して、実はその裏には大学全体を直していかなければいけないというところへ結びつく。段階を踏んで進んでいくということです。要するに、あるカリスマ的な人が現れて一挙に変えられるという大学でないということは、慶應の伝統の中でこれは証明されているわけです。今回もしその辺がうまくいけば、実は人事という言葉は出さなかったのですが、日吉でカリキュラムをつくるに当たって人事もカリキュラムの内容に合わせた検討委員会を設置することを議論すべき時期が来ていると思います。しかしながら、とりあえず人事は学部

が握っていますから、当面は各学部で決定した人事を承認していただくという形を取って徐々に変わっていくしかないというふうに考えています。

たぶん私の考え方は少し古いかもしれませんが、慶應義塾の歴史を見ていく限りにおいて、ドラスチックに変わるのとは従来の学部の外に何か新しいものをつくるしかないというふうに思っています。でも必要なことは、いまある学部の体制を生かしてよくするには、やはりステップを踏むのがいいということです。それもあまりゆっくりしている余裕はない筈です。立教大学のような形のやり方が本当に慶應にとっていいのかどうかというのは、私はまだよく分かりません。

西村 羽田さんのおっしゃる通りだと思います。形式だけの委員会などができて、実質的に機能しないというのは最悪のパターンだと思いますので、実質的に何がそこでできるのかということを考えなければならないと思います。各学部はともかく、大学全体となるとあまり大きなことはなかなか難しいとは思いますが、ひとつは今回の調査で現行のたとえば総合教育科目の構成やバランス、あるいは科目のあるべき姿など、そういったモデルのようなものがある程度示されれば、その方向に向かって科目を調整し、組み立てていくという方向性はあり得るのではないかと考えていました。

ただそれを実現していくためには、現状の各科目は学部設置の形になっていますので、実質的には学部合い乗りの科目をある意味で共通枠的なものとして、その共通枠について各学部の代表が出た委員会で、どういう科目を設置したらいいのか、あるいは必要ないと判断するのか、そういうことから始められると思います。そのことについてはおそらく各学部間でそれほど問題なくできるような気がします。日吉の問題だという指摘も一理あるかもしれませんが。そこから人事とおっしゃいましたけれども、科目担当者はどの学部につけるかは別として、どういう人がどういう科目が必要かという議論は出てくると思います。そういう余裕がある程度ないと、やはりなかなか新しいことはできないと思います。

変な言い方ですが、バッファに当たるようなものが科目も人事もある程度あって、その共通枠のようなものを

各学部が検討して、どういうふうに使っていくかということを考えるということになると思います。そのときに各学部いろいろ考え方はあると思いますが、部会単位で考えるか、学部単位で考えるかというのはありますけれども、ある程度の調整が必要になってくるでしょう。そこになりますとかなり難しい問題が出てくるのではないかと思います。これをさらにドラスチックに進めようとすると、やはり教員所属の問題になってくると思います。先日、金沢大学の話を知ると、実質的にほとんど学部の意味がなくなってしまっていて、カリキュラムだけはあるということでした。たとえば、文学部にはカリキュラムがあるけれども、これは全学出動でそれぞれふさわしい人が科目を担当する。その出来上がっている科目の中から文学部にふさわしい科目を集めてカリキュラムをつくるという形になっています。そうすると、どこが科目を設定し、どこがその担当者を決めるのかということと学部ではないのです。それがいいのかどうかは別として、これは教員組織として非常に弱い、組織としては弱体化します。私の立場からそういうことを言うべきかどうか分からないのですが、これはあまり望ましいことではないと思います。つまり、日吉の専任教員の方が現状の学部の教員組織から離れるというのは、やはり私としてはいいこととは思えないからです。ですから、そこをもしやるとすれば非常に慎重に考える必要があると思います。

いろいろなやり方があると思いますし、副専攻をどういうふうに位置づけるかなど、これもやはり考えなくてはいけないのではないかと思います。やれることはいろいろあるのではないかと思います。そこはご意見をいろいろいただきながら進めていくということになると思います。ただそれはやはり学部の理解を得ながら進めていくという形にどうしてもなりますので、そこはできることから実質的に実現していきたいと思います。

司会 ありがとうございます。ほかにご発言いただけませんかでしょうか。倉館さん、どうぞ。

倉館健一 外国語教育研究センターの倉館と申します。この基盤研究にもかかわらせていただいております。私からは小さなことから3点ほど申し上げたいと思いま

す。まず村山先生から評価についてのお話がありました。私はフランス語を担当していますが、このような初習外国語については他の科目とは質を異にしているような印象を持っております。と申しますのも、外国語教育における教員養成等では、評価は中心的な課題として扱われており、授業を運営していく上でもこういった能力は本来非常に求められているものだと思っています。他の科目と評価の基準等で若干深みというか、広がりを持っている。そうした事情から、他の科目と同じように扱うために平常点という言葉ができてきているようにも思います。もう少し細分化していくならば、少し別に考えていかなければならないもののように思っています。

ふたつ目ですけれども、これは実は英語教育においても同じようなことが言えるのかもしれないと思っています。習熟度別の話がありましたが、私は外国語教育研究センターに属している者として、「人が足りなくなるからなかなか習熟度別のカリキュラムは組めない」というお話があった際に、外国語教育研究センターに期待されているものは果たしてあるのかというところをお聞きしたいと思っています。といいますのも、学部専門内容に近い英語の授業などは、学部でやるのが本来望ましいとも思いますし、センターというところがあれば何か一般的な内容について活用できる可能性もあるのではないかと考えております。ぜひどのような点を期待されているのかお聞きしたいと思っています。

3点目は全然違う話になりますけど、シラバス等をデジタル化するというお話がありました。個人的経験では教職員の負荷というのはおそらくみなさんの想像するよりもずっと高いものになるかと思っています。例えば藤沢で非常勤を10年来やっておりますけれども、SFCでは当初からなぜSAやTAを考慮したかという、シラバスをデジタル化するために、どうにか負担を減らそうとしたからでした。かなり膨大なお金も組みましたし、システム構築にもかなり手間が掛かっています。このようなものを準備する上で、先ほど伊藤先生からもシラバス作成を徹底させていくというお話があったと思いますが、システム化・デジタル化は技術的にもかなり大変なものでありまして、その手順等をきちんと確認した方がいいという点が3点目です。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは2番目の外国語研究センターに期待すべきところがあるのかどうかということをお坂本さん。

坂本 倉館さんからお話では、人が足りないからなかなか習熟度別クラス編成が取りにくい、とご理解をいただいているようですが、現実には各学部ともそれを行っているわけで、やっているけれども大変だ、ということです。

その大変さというのは先ほど申し上げたように、クラス構成が細分化されてしまうためにひとつの種類の科目をたくさん設置できなくて履修機会が減るところにあります。したがって、比較的需要が少なくて設置が難しくなってしまうような科目に関しては、どこかで肩代わりしてくれると大変うれしいことは間違いありません。そうなりがちなのは、たいていの場合は一番高いレベルのクラス、超上級といわれるようなレベルか、あるいは補習に類するようなレベルです。超上級に関しては文学部では、英語と中国語に関してはすでに必修科目の一部として外国語教育研究センターの科目を利用させていただいております。ですから、もう一步踏み込んで、補習に類するようなクラスもご設置いただけると大変助かります。現在も基礎や、そうした名前のついたクラスはありますが、大学に入ってはきたけれど、中学、高校1～2年レベルの英語を忘れてしまっているといった学生のためのクラスではないように思います。ですから、そうしたものについてもご相談させていただければ大変うれしく思います。

同時にひとつ、もし実現の可能性があればご検討いただきたいのが成績評価基準です。外国語教育研究センターの授業を利用させていただくときに、成績評価基準などのガイドラインが学部のもので大きく懸け離れていると問題です。要するにつじつまが合わなくなる。公正な成績評価を行き渡らせたいと思っていますので、たとえば外国語教育研究センターならではの成績評価をすると同時に、透明度の高い形で乗り入れている学部の成績評価に変換するようなシステムをご用意いただければ、非常にスムーズに話が進むのではないかと考えております。何かお願いばかりで申し訳ないのですが、

よろしくご検討ください。

司会 シラバスのウェブのことは佐藤さん一言お願いします。

佐藤 シラバスを電子化すると労力がすごく大変になるであろうということは、倉館さんと CMS (Contents Management System) を一緒につくった経験もありますし、それは十分に分かっています。これを一齐に日吉、三田でやるというのは、たぶん無理でしょう。おそらく学事センターと各学部とでかなり周到な準備をして、かつどこかの学部でまずパイロット的に導入してもらって、それをじわじわと広めていくという方法しかないのかというふうに考えています。それは一足飛びにいきなりだろーと思います。たとえば、履修登録システムを電子化するときには、確か理工学部でまず新しいシステムを使って、それを日吉にもってきたということがありましたよね。それぐらいの慎重さが必要だと思います。

一方では我々は11月にシラバスの原稿を出せと言われて、実際に学生が見るのは何カ月も後というのは、やはりこれは何とかしなければいけないのではないかと思います。普通にいまのプロセスでやるとそれぐらい時間がかかることはどうしても仕方がないですけども、電子化はそうした問題の解決法のひとつになるのではというのが、この提案の趣旨です。

司会 学事の方にもご言い分があると思いますので。

栗谷文治 理工学部のシステムというのは、学事サイドで作ったシステムをまず理工学部で試験的に導入してもらおうというやり方でした。

現行のやり方ですとシラバス用の原稿を紙ベースでいただいて、それを本の形にして出しているわけです。それからあとは pdf にしてウェブに載せています。本格的な検索機能をつけてウェブで見られるようにということになりますと、たとえば学事センターで全部データ入力をするなど、まず労力的に無理であり方法論としてもとり得ないと思います。そうなってくると、そのためのシステムをつくり、発信元入力といいますか、そういうこ

とが考えられると思います。

それからもうひとつは、pdf でウェブに載せていますが、あれも全部公開しているわけではありません。塾外には概要部分のみ公開していますが、このままでいいのかという問題があります。最初はいろいろと抵抗があったものですから、そういう形を取らせていただいているのですが、将来的にはシラバスを全部載せてしまうという形に移行していくのかなという気がしております。

司会 可能性が近い将来あるのでしょうか。

栗谷 ここに至った経緯がありますので、私の立場からは軽々しく言えないと思います。

司会 ありがとうございます。まだご発言いただきたいのですが、予定の時間を過ぎてしまいましたので、おひとりだけ、それではお願いいたします。

長田進 経済学部の長田といいます。すごく小さいことから、少し大きなことまでいろいろありますが、最初に思ったことは、シラバスの量を増やして薄くするのだったら字をもう少し小さくすればいいのではないかなと思うのです。僕らの立場からすると、たぶんあのぐらいが読みやすいですけど、学生だとたぶんもっと小さい字でも読めると思います。冗談ではなくて、僕は通信教育部の授業をやっていますけど、そうするとご高齢の人が多いので配布資料の字の大きさを変えています。要するに皆さんたぶん PowerPoint のスライドを1ページ6枚組みでよく配ると思いますが、あれは通信でやると読めないから大きくしろと言われました。でも学部生の学生があれが小さいから勘弁してくれと言ったのは聞いたことはないで、だからすごくメッシュな話として字を小さくすればもう少し薄くなるのではないかな。これはいま、思いついた話です。

次に、学生の評価の話在先ほどから聞いていて、科目によって違うと思いますけれども、分かるようで分からないような不思議な気分なのです。というのは、過程を重視しろと言いながら絶対評価を求めるというのはどう

いうことでしょうか。それは単に授業中のレポートを出したら確実に単位を取れるようにしてくれと言っているのか、いろいろ考えてしまいます。そのあたりに関してどうお考えか、よろしかったら聞きたいと思います。私が授業で学生に最初のスタンスとして言うのは、「過程が褒められた時代ではなくて、大学生以上は逆にある程度結果を出すことや、理解したことをきちんと意見で出せることを求められている。だから、試験で評価する」ということです。ただ科目によってそれがなじまないものもきっとあると思います。たとえば実験科目などはそうですから、すべてがそれだと思わないのですが、過程を評価して絶対評価というのはどういうことなのかということがいまひとつイメージが浮かびません。

たとえば、試験をやると学生が期待の答えを書けず、そのまま絶対評価を行うとどうしようもないということがあって、全体のバランスを見ながら、もう1回ポイントを見直して評価を変えざるを得ないということも当然あるわけです。もちろん1度決めたポイントを下げたり、人によって使い分けたりということはフェアな立場からはしませんけれども、そうするとき学生が期待している絶対評価、それも甘んじて受け入れるという話なのか、いろいろ思うことがあるので、よろしかったら意見を聞きたいと思います。

最後の提言であった共通科目の話は個人的に私もあるといいと思います。というのは、全学部対象にしていますけど、年によって特定の学部の人のはんこをもらわないと授業を受けることができないとか、別の年になると別の学部の人のはんこを取りこななければいけなくて、去年はんこを押した学部の人はないで取れるなど、何か教員からすると複雑怪奇なのです。そのあたりを含めて、もしそういうものができるのであれば検討していただきたいという希望であります。以上です。

村山 私はプロセス重視の方とはとにかく頑張っている者が報われてほしいと率直に思っていると思います。そちらの方が学生の正直な気持ちだと思います。絶対評価がいいと言っているのは、相対評価に比べて、相対評価で結局分布があってだれかが落ちたり、どこかに危険があったりするということではなくて、あるものをクリアしたらそれが獲得であるという見方の絶対評価です。相対的

に分布がなされて端っこに行くのと取れないかもしれないと、たぶんそういう危険に対する不安だという気がします。ですから、学生はどちらにしても自分が救われるような方向で希望していると思います。

成績評価について言わせていただきたいのは、システムとして日吉共通の大きな組織がカリキュラムを考えていくという方向は必要だと思いますが、ひとりひとり教員が教員として当たり前に成績評価のことを考えて、教育のプロとして指針を持って「こうやってやります」ということを言えなければならないだろうということです。その上で教員同士が評価方法に関して意見を交換し、ぶつかり合って、もう少しシステムチックに統合されていけば、学生に向かって堂々と話ができるのです。それを学生に浸透させていけば、教員は一生懸命やっていますと、これが教えたいことであり、学んでほしいことなので評価につながりますということを地道に話していこうではないかということです。その一歩がないとFDは上がらないわけで、どんなにいいカリキュラムを策定しても、結局教員の気持ち、質は変わらないと思います。私はそこが一番大事なのではないかということを言いたいのです。

司会 以上で終わります。(拍手)

パネリスト紹介（発言順）

伊藤 行雄（いとう・ゆきお）座長、経済学部教授、教養研究センター・コーディネーター

専攻分野：ドイツ文学、比較文化論

慶應義塾大学文学部独文学科卒業。1973年3月慶應義塾大学文学研究科博士課程単位取得退学。現代ドイツ文学、特に詩人リルケに関する研究。最近はリルケと美術の関係を扱っている。著作・論文等：「パリのエピソードにみられる『マルテの手記』の作品構造」（藝文研究）、「リルケのフォーゲラー論」（日吉紀要ドイツ語・文学）、「東京—私の原風景」鼎談（三田評論）、「生と死と都市と」対談（読書のいずみ）、「知と創造のエロスははぐくむチューリヒ」（三田評論）、詩集『球形の旅路』（書誌山田）、『リルケ全集』全10巻 共訳（河出書房新社）など。

村山 光義（むらやま・みつよし） 体育研究所准教授、教養研究センター所員

専攻分野：体育学

専門領域は、運動生理学、バイオメカニクスで、特に「筋肉の硬度変化の計測とその生理学的意義の検討」が主要研究テーマ。実技指導ではバレーボール、フライングディスク、ニュースポーツ、スキー等を担当するとともに運動技術指導法に関するバイオメカニクスの研究にも取り組んでいる。スポーツ健康科学博士。

坂本 光（さかもと・ひかる） 文学部准教授、教養研究センター・コーディネーター

専攻分野：英文学・文化、19・20世紀

慶應義塾大学文学部文学科英米文学専攻卒業。慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻後期博士課程単位取得退学。専門領域は19-20世紀を中心とした英国文学・文化研究で、特に非イギリス系英国作家による作品を対象とする。近年はMary Shelley、Oscar Wilde、Bram Stoker などによる19世紀英国ゴシック文学を中心に研究。著作に『ユートピアの期限』（共著、慶應義塾大学出版会、2002年）、『イギリス文学と旅のナラティブ』（共著、慶應義塾大学出版会、2004年）など。

萩原 眞一（はぎわら・しんいち）理工学部教授、教養研究センター副所長

専攻分野：現代英文学

慶應義塾大学文学部英米文学専攻卒業。慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了。専門領域は19・20世紀の英文学・アイルランド文学。著作に「電気、あるいは生命の火花—十八世紀欧米における雷観」『雷文化論』（共著、慶應義塾大学出版会、2007年）、「切断／補綴、あるいは身体の再構成—オットーディックスの1枚の絵をめぐる」『腐敗と再生—身体医文化論Ⅲ』（共著、慶應義塾大学出版会、2004年）など。

佐藤 望（さとう・のぞみ）商学部教授、教養研究センター副所長

専攻分野：西洋音楽史

著書『ドイツ・バロック器楽論——1650～1750年頃のドイツ音楽理論における器楽のタイポロジー』（2005年）、『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』（編著、2006年）の他、ドイツ音楽史、音楽理論、鍵盤演奏法に関する学術論文がある。近年は、音楽教育、大学教養教育、芸術運営の諸問題に関わる研究にも携わっている。博士（音楽学）。

ディスカッサント紹介

西村 太良（にしむら・たろう）担当常任理事、教養研究センター所員

専攻分野：西洋古典学、現代ギリシア語

慶應義塾大学大学院文学研究修士課程 1975 年修了。慶應義塾大学文学部専任講師、助教授を経て 1966 年教授。2001 年から 05 年 7 月まで文学部長・文学研究科委員長。05 年 7 月から常任理事。

朝吹 亮二（あさぶき・りょうじ）日吉主任代表、法学部教授、教養研究センター・コーディネーター

専攻分野：フランス語、フランス文学

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 1982 年単位取得退学。慶應義塾大学法学部専任講師、助教授を経て 97 年教授。法学部学習指導副主任、学習指導主任、外国語学校主事等を歴任し、2001 年 10 月から法学部日吉主任。

司会者紹介

木俣 章（きまた・しょう）法学部専任講師、教養研究センター所員

専攻分野：フランス語、19 世紀フランス文学

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 1980 年単位取得退学。81 年から慶應義塾大学法学部専任講師。

慶應義塾大学教養研究センター第 8 回シンポジウム

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 —改革への処方箋—

2007 年 9 月 30 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 横山千晶

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-563-1111（代表）

Email lib-arts@ml.hc.cc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>